A red floral pattern, possibly a traditional Japanese textile design, is located in the top right corner of the page. It features stylized flowers and leaves in a repeating pattern.

四季を楽しむ花づくり



ハボタン



パンジー



デージー



コリウス



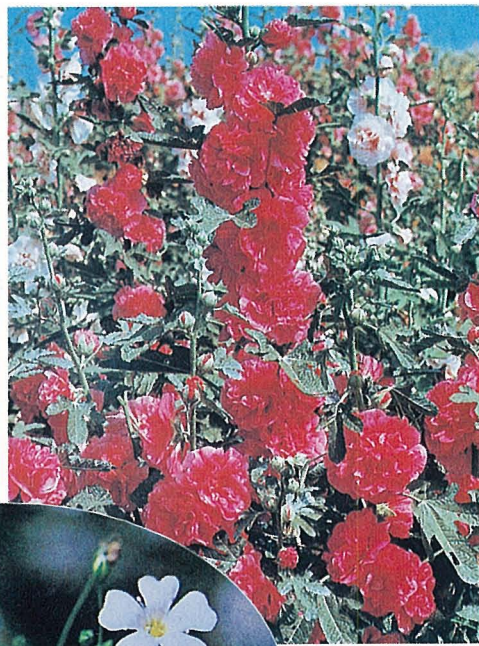
ペチュニア



サルビア



ムギワラギク



タチアオイ



カスミノウ



アスター



ジキタリス



キンセンカ



ニチニチソウ



ケイトウ



キンレンカ



ペコニア



インパチェンス

1. 1・2 年生草花

種子をまいて1・2年間で生長開花し、結実してライフサイクルを終える植物を1・2年草とよんでいます。そのうち、種子が発芽して満1年以内にライフサイクルを終えるものを1年草、満1年以上を経て2年目に開花するものを2年草としています。

1. 1年生草花と2年生草花

1年生草花は、種子をまく時期によって春まきと秋まきに大別されます。しかし、園芸的には正しい分類のしかたではないのです。春まき1年生草花の多くは、熱帯～亜熱帯原産で、ほとんどが非耐寒性であるのに対して、秋まき1年生草花は、欧州あるいは北米、中国など温帯原産のもので、耐寒または、半耐寒性の性質をもっているのです。つまり、1年草が春まきと秋まきに区別されるのは、それらの原産地の環境と密接な関係があるのです。したがって秋まき1年生草花のなかには、春にまいてもよいものもあるのです。

なお、たねまき後、まる1年以上たたないと開花しない草花は、ここでいう2年生草花なのです。

2. 春まきと秋まき

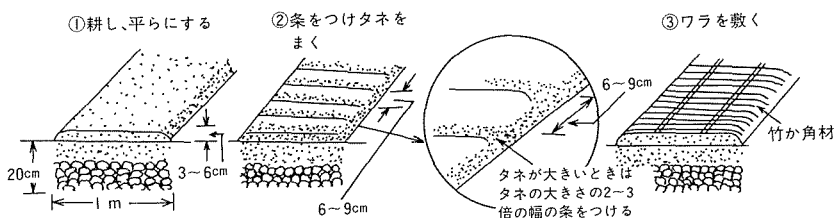
春まき1年草は、前述のとおりほとんどが耐寒性のない熱帯、亜熱帯原産の草花ですから、高温下でよく生長し、開花するものです。そしてこれらの多くの草花は、日長に反応して開花する性質をもっています。一般に春まき1年草のたねまき適期は、桜の「ソメイヨシノ」の花が散るころがよいといわれています。あまり早くまくのはよくありません。秋まき1年草は、温帯原産の草花ですから、ある程度、生長したあとに一度低温にあって花芽ができる性質のものと、春にまいても花は咲くけれども株が張らずに小さいままで開花するので、実用上秋まきとして株を茂らせるものがあります。

だいたい寒さに強いものですが、本県のように冬期間、寒さのきびしいところでは、やはりそれなりの防寒や冬越しのための工夫が必要です。一般に秋まき1年草のたねまき適期は、9月中旬から10月上旬ごろです。適期が短く、早いと温度が高く、また遅くなると発芽後の発育期間が短くなるので、秋まきの場合、適期をはずさぬように注意が必要です。

3. 種のとまき方

(1) 大きなたねのまき方

キンセンカ、ヒャクニチソウなどのような大きなたねは、適当な幅のまき床をつくり、表面を平らにし、すじまきにします。覆土は、たねの厚さの2倍ぐ



らいとし、上に敷きワラなどをして乾燥を防ぎます。

(2) 直根性草花のたねのまき方

マメ科植物などのように、太い根が一本長くなる種類や、移植をきらうものは、直まきといって、目的の場所に2～3粒づつ点まきにします。発芽後は、間引きして1本にしてやります。

(3) 細かい小さなたねのまき方

ベゴニア・センパフローレンスなどのように、1mm以下の微細なたねや家庭において少量だけつくるような場合は、鉢や箱まきにしてやります。

Q&A

花づくりこんなときどうする？

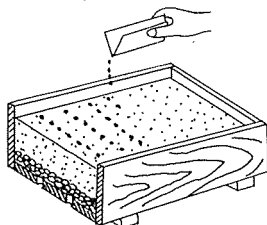
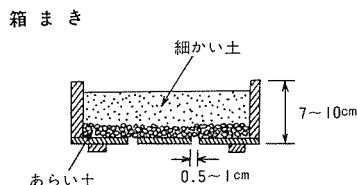
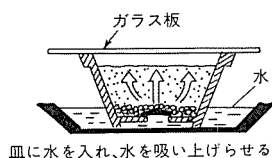
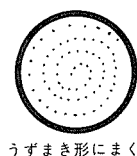
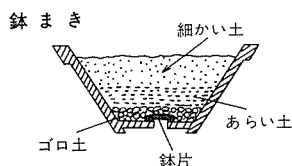
Q サルビアの茎ばかりが伸びて、株の姿が悪くなります。どうしたらよいのでしょうか？

A サルビアの株の姿が、格好悪くなるのは茎の先端に花をつけるためです。花が咲いている間は、わき芽の生育が悪く、茎ばかりが長く伸びてしまうのです。ですから、夏になって姿の悪い株や花数の少ない株は、思いきっていちばん草丈の低い株の高さにそろえて切ってしまいます。切り戻したあとは追肥をし、たっぷりかん水してやります。秋には、わき芽が伸びだし、株がこんもりと茂って、花もたくさん咲きます。

Q インパチェンスの葉が、夏になって急に落ちてしまいました。どうしてでしょうか？

A 強い直射日光に当たったり、ペラシダなどの乾燥のはげしい場所ではハダニによる被害が出たりして、葉が落ちてしまうことがあります。これは、高温、乾燥、強光線など、環境条件が悪くなると起るのです。涼しい日陰に移し、過湿にならぬよう水やりをし、夏場をしのぎましょう。秋になれば、新芽が伸び始め、元気をとりもどします。

Q ペチュニアをフラワーポットや吊り鉢で格好よく仕立てたいのですが、どうしたらよいのでしょうか？



4. 苗の育て方

(1) 発芽から移植まで

1年生草花は、早いもので3~4日、遅くとも2週間で発芽します。発芽後は、ジョウロを使ってのかん水に切り換え、よく日に当ててやります。光や水分を調節し徒長させず、根張のよいがっちりとした苗をつくりましょう。よい苗ができれば花づくりは半分以上成功したといえます。子葉が開ききったときから、本葉1~2枚に育ったとき、移植をします。ここまでは、無肥料とします。

A ペチュニアは、丈夫で栽培も容易なのですが、見た感じで格好よく仕立てるには、少し工夫がいるようです。それにはまず、目的に応じた品種を選ぶこと、そしてさらに、生育に応じて間伸びした茎、枝数の少ない茎を切り戻し、摘芯をくり返しておこなうことです。この摘芯は、植えつけ時から何度もくり返してやりましょう。ボリューム感のある姿のよい株に育つはずです。

Q ベコニア・センパフローレンスの株の見えが悪くなりました。どうしたらよいのでしょうか？

A 四季咲きベゴニアとも呼ばれるセンパフローレンスは、温度さえあ

れば周年開花します。花は茎の先端に近い葉のつけ根に咲き、花の咲いた個所からは、わき芽が出てきません。そこで花が咲きつづけると茎だけがどんどん伸びて、株の姿が悪くなるのです。こんな時は、株全体を株元から3分の2ぐらいのところまで切り戻してやります。摘芯をくり返して株の格好をととのえます。冬期は温度が5℃以上あれば枯れることはありません。

冬越しした株は、生育が始まる前に軽く切り戻して薄めの液肥を与えましょう。

Q 小葉性の美しいコリウスを知人からもらいました。ふやすのはさし芽でよくふやせるのですが、冬は枯れてしまいます。毎年育てるよい方法は

(2) 上手な移植のしかた

移植については、平箱かプラスチック製のパット、ビニールポットなどに土を入れて、これに植え替えます。移植用土は、たねまき用土に草木灰やくん炭を混ぜてやります。

移植する苗は、なるべく根を切らぬように、ていねいにほぐすように抜きとり、3cm間隔ぐらいにして植えつけます。植え終れば、十分にかん水をして2～3日のあいだ日陰におき、その後日に当ててやります。

追肥として、液肥を1週間に1回程度、かん水がわりに与えます。みるみるうちに苗は大きく育ってくれます。本葉6～8枚で定植します。

6. 上手な定植のしかた

花壇にはあらかじめ堆肥などの有機質肥料を混入しておきます(一週間前)。

植えつけ間隔は、小型種で12～15cm、中型種で20～25cm、大型種で30～40cmぐらいが適当です。植えつけは、浅植え、深植えをせず、ほどよく植え込みます。植えつけ後のかん水は、たっぷりおこなってください。定植後、一週間程度たったところで、化成肥料を追肥してやります。その後は、月に1回程度の追肥です。長期間花を楽しむために、こまめに花ガラ摘みや整枝をしてやりましょう。手をかければかけるほどりっぱな花が、次々と咲き誇ってくれます。

ないものでしょうか。

A 初夏から晩秋にかけて美しい彩りの葉をみせてくれるコリウスは、寒さには弱い暑さに強く、高温でさえあれば冬でも生育をつづけます。

ある程度育ったコリウスの天芽を三節付けて切り取り、下葉一節をかき取って砂を入れた容器にさし、水をたたえておきますと、すぐに発根してくれます。小葉性のコリウスは、たねがとれませんのでこうした元気のいい小苗を秋になってからつくっておき、小鉢に植えて暖かい室内で越冬させてやります。約10℃の温度が必要です。春には大きな鉢にはちがえて大きく育ててやりましょう。

Q カトレアの花が咲きそうですが、バルブの横から新芽が発生し、10cmほどになりました。どのような管理をすればよいのでしょうか。

A 花を早く咲かせるために温度を高くして育てますと、どうしても新芽の発生がみられます。新芽が生長すれば、その分養分がそちらにまわり、花が咲いても小さい花となってしまいます。つぼみがついたころから温度は高すぎず、鉢の中も乾かし気味につくると新芽の伸びをある程度抑え、正常な開花がみられます。良い花を咲かせるためには新芽をかきとることもあります。



ハ ボ タ ン

- ボタンナ
- アブラナ科
- 夏まき1年草
- 観賞期 11月上旬～2月

〈種 類〉

ハボタンの原種は、ヨーロッパに分布し、古くは野菜として栽培されていました。学名のブラシカ・オレラジーの由来は、まさに「キャベツの仲間」という意味なのです。つまり、ハボタンはキャベツを観賞用に改良した珍しい植物といえます。

〈性 質〉

本来は、秋まき1年草として扱われていますが、時期的には夏まきの観葉草花といえます。耐寒性があり秋から冬にかけて寒さに合わせますが、むしろこの寒さに合うことで着色し色づきます。

〈種 ま き〉

7月上旬から8月上旬にたねまきします。切り花にしたいときは早めに、寄せ植え材料として使うには遅めにたねまきします。

〈育苗・定植〉

発芽してすぐに移植し、9月に入って本葉7～8枚のころにもう一度、仮植してやります。花壇や鉢への定植は、11月に入って芯葉が色づいた頃がよいでしょう。

〈肥 料〉

育苗中は、月2～3回の割合で、化成肥料を与え、徐々に窒素肥料を控え、草木灰などのカリ肥料を多く与えてやります。

〈手 入 れ〉

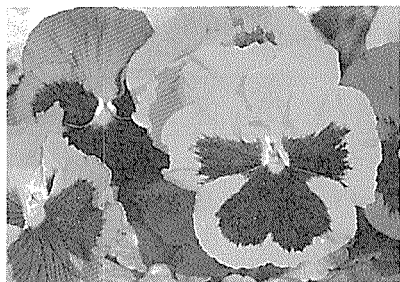
日当たり、水はけ、風通しのよい場所に植えてください。定植の際は、ぎっしりと間隔をつめて植えます。また、必要に応じて下葉かきをしてやりましょう。茎を短くするためにBナイン処理をおすすめします。

〈病 害 虫〉

大敵は、キャベツと同様にアオムシです。また、コナガの幼虫がつくこともあります。カルホス乳剤やデイプテレックス乳剤などの殺虫剤を定期的に散布してください。病気の心配はありません。

〈楽しみ方〉

初霜から積雪時までの期間、格好の草花が少ないのが本県の実情ですが、ハボタンは、その不満をなくしてくれます。冬花壇の材料として鉢ものとして効果的です。



パンジー

- サンシキスマレ
- スマレ科
- 秋まき1年草
- 開花期 3～5月

〈種 類〉

春花壇に欠かせない草花といえばこのパンジーです。パンジーという名前は、フランス語のパンセ「考える、もの思う」からきたものです。花色がカラフルで色彩に富んでいますが、花壇では、黄、ブルー系が目立ちます。

現在、私たちが栽培しているパンジーは、北ヨーロッパ原産の野生種を交配育成した園芸種です。

〈性 質〉

寒さに対して強く高温多湿に弱いようです。本来は多年草ですが夏の暑さに弱いので秋まき1年草として扱っています。

〈種 ま き〉

パンジーは、8月下旬～9月中旬ごろまでにたねまきをします。早すぎると夏の高温で発芽しません。また逆に遅くなると冬までに株が十分育たないので、まき時を厳守してください。

〈育苗・定植〉

本葉2～3枚で移植します。本葉7～8枚で花壇に定植しますが、株間は20cmぐらいがよいでしょう。

〈肥 料〉

定植の際、堆肥などの有機質肥料を十分施しますが、年内に一回、翌春の3月から1～2回程度、追肥します。

〈手 入 れ〉

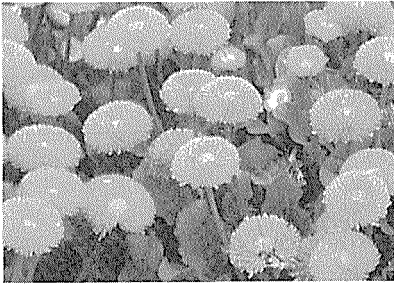
花が咲いている間は追肥を続けますが、咲き終わった花ガラはこまめにつみとります。

〈病 害 虫〉

灰色かび病にはベンレートやマンネブダイセンをまいて予防し、アカダニは殺ダニ剤で、ウイルス病については、冬の間にマラソン乳剤、スミチオン乳剤をまいてアブラムシの発生を防ぎます。

〈楽しみ方〉

カラフルな花壇植えのほか、プランターやつり鉢作り、切り花として楽しめます。



デ ー ジ ー

- ヒナギク
- キク科
- 秋まき1年草
- 開花期 3～5月

〈種 類〉

デージーは、赤・桃・白などのかわいらしい菊状花を株いっぱいに咲かせ、春花壇にはもってこいの草花といえます。

デージーの名は、`太陽の目`を意味し、和名のヒナギクも、優しくかわいい草姿を表しています。花期の長さ、生命力の強さから`延命菊`ともいわれています。

〈性 質〉

もともとは、多年草で寒さには強いのですが、高温多湿に弱く梅雨時になると枯れてしまうところから、秋まきの1年草として扱っています。

〈種 ま き〉

9月上・中旬にたねまきします。発芽の適温は15～20℃です。

〈育苗・定植〉

本葉2～3枚のころ、2～3cm間隔に植え広げ、10月中旬に15cm間隔にて定植します。日当たりのよい場所に植え、11月以降は、霜よけや冬越しのための防寒をしてやります。

〈肥 料〉

油かす、鶏糞などの有機質肥料を元肥として与え、追肥は生育に応じて化成肥料を1～2回程度施します。

〈手 入 れ〉

育苗時や定植の際、かん水に注意し、乾燥しすぎないように注意しましょう。花ガラはその都度摘みとり、たねを实らせないようにします。防寒については、特に嚴重にする必要はありません。

〈病 害 虫〉

つきやすいアブラムシと葉を食害するテントウムシダマシは早めにマラソン乳剤かオルトラン粒剤で駆除します。

〈楽しみ方〉

花壇に色別で群植したり、縁どり用として配植するときれいになります。

また、パンジーなどと組み合わせて楽しむのもおもしろいものです。



ヤグルマソウ

- ヤグルマギク、セントウレア
- キク科
- 秋まき 1 年草
- 開花期 4 ～ 5 月

〈種 類〉

花形が陽春の空を泳ぐ鯉のぼりの矢車を思わせるところからヤグルマソウという名がつけました。しかし、日本の深山に自生するユキノシタ科のヤグルマソウと区別するため、ヤグルマギクと呼ばれたりしています。一重と八重のものがあ
り、高性種と矮性種があります。また花色も、青、紫、赤、桃、白と豊富です。

〈性 質〉

丈夫な秋まき草花ですが、寒地では秋まきよりはむしろ春まきして夏に開花させる栽培が好適なようです。もともとヤグルマソウは、寒さにも強く、簡単な防寒で冬越しが可能です。

〈種 ま き〉

9 月上・中旬がたねまき適期です。花壇に直まきするか育苗箱にすじまきします。

〈育苗・定植〉

本葉 2 ～ 3 枚のころに苗床へ 3 ～ 4 cm 間隔で仮植し、切り花の高性種は本葉 7 ～ 8 枚で定植してやります。日当たり、風通し、水はけのよい所を選びましょう。直根性の草花ですから、春になってからの大苗の移植はきらいです。

〈肥 料〉

肥よくな土地であれば無肥料でもよく育ちます。幼苗期に肥料が効き過ぎる(特に窒素肥料)と茎葉が軟弱徒長して花が貧弱になるのでりん酸、カリ分の多い草木灰を与え、追肥は、1 ～ 2 回施す程度です。

〈手 入 れ〉

寒さに強いとはいっても、本県では冬越しのための防寒が必要です。

〈病 害 虫〉

アブラムシがつきやすいのでダイシストン粒剤を株もとにまいてください。菌核病、ウドンコ病には、トップジンが有効です。



カ ス ミ ソ ウ

- ムレナデシコ
- ナデシコ科
- 秋まき 1 年草または多年草
- 開花期 5 ～ 6 月

〈種 類〉

小さな花をいっぱいつけて咲きそろうカスミソウの姿は、遠くから見るとまさに「春霞」を思わせるようです。近年になって人気が高まり、切り花、花壇などで幅広く利用されるようになりました。

カーネーションやバラの花束に添える花としては、これに勝るものはありません。最近では宿根性のカスミソウにも人気があります。

〈性 質〉

耐寒性が強く、至って丈夫な秋まき草花です。

〈種 ま き〉

9 月中旬が適期で、直まきにすれば 10 月中旬ごろまでまくことができます。種子は、10cm 間隔に 3 ～ 5 粒ずつ点まきするかすじまきにします。

〈育苗・定植〉

寒さのきびしい本県では、苗の状態でも越しさせ、春に定植したほうがよいでしょう。

〈肥 料〉

窒素分が多すぎると茎葉が軟弱徒長化します。また酸性の土をきらいますので、石灰や草木灰をあらかじめ多く与えるようにします。

〈手 入 れ〉

秋の植え替えは、10 月中旬ぐらいまでにすませ、寒さの来る前によく根を張らせておくことが大切です。また春以降、茎が急速に伸びてきますので、倒伏防止のための手入れが必要です。

〈病 害 虫〉

アブラムシには、馬拉ソン乳剤かスミチオン乳剤を蕾が見えたら月に 2 回程度散布し、白絹病にはベンレートかオーソサイド水和剤を灌注します。

〈楽しみ方〉

切り花では、花束や生け花の材料として、また、花壇の背景に群植して楽しむのもおもしろいものです。



マリーゴールド

- クジャクソウ、マンジュギク
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 6～11月

〈種 類〉

初夏から秋にかけての花壇で、必ずといってよいほど見かける草花にマリーゴールドがあります。メキシコ原産のこの花は、美しくも愛らしいカーネーションにも似た黄色またはオレンジ色の花です。アフリカン種とフレンチ種があり、最近では、両系統の交配種のほか、シグナータ種が出回っています。

〈性 質〉

熱帯性の植物ですが、冷涼な気候を好みます。むしろ高温下では、花つきが悪くなります。真夏の7月下旬から花は一休みをしますが、9月に入って再び開花し、11月中旬まで咲き続けます。

〈種 ま き〉

まきどきは、4月下旬～5月中旬がよく、発芽温度は20℃、発芽日数は、4～5日間です。

〈育苗・定植〉

本葉が2～3枚で仮植し、本葉8～10枚で花壇や鉢に植えてやりましょう。矮性種では20×30cm、高性種では30×40cmの間隔で植えると最後には見栄えのよいものになります。

〈肥 料〉

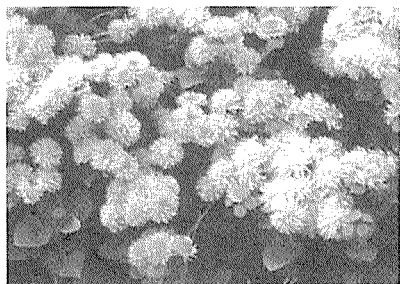
元肥に鶏糞、油かすなどの有機質肥料を土全体とよく混ぜて施します。追肥には、化成肥料なら1㎡当たり50gを月1回与え、液肥ならば500倍液を月2回ぐらい与えてください。

〈手 入 れ〉

定植後、次第にこみ合ってきますと下枝の発生が悪くなり、花がとぎれがちとなって見苦しくなりますので、間引きをしたり、刈り込みをしてやります。特に花ガラ摘みをかねて適切に整枝することが効果的です。

〈病 害 虫〉

病害虫のつきにくい草花ですが、まれにウドンコ病やハダニ、アブラムシの被害も出ますので早目にベンレートやマラソン乳剤で防除してやりましょう。なお、マリーゴールドはその根から殺セン虫成分の分泌があって、ネマトーダ防除に効果があります。



アゲラタム

- カッコウアザミ
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 7月上旬～11月

〈種 類〉

アゲラタムは、ペルー、メキシコ原産の草花で、草丈は20cm内外と低く、よく枝分かれした株が、半球状に茂り、アザミに似た小花をつけて、いかにも清涼感を味わせてくれます。

〈性 質〉

原産地では、多年草として取り扱っていますが、寒さに弱いところから温帯地方では春まき1年草として扱っています。

〈種 ま き〉

発芽適温は、15～20℃で、本県においては4月下旬～6月上旬がまきどきです。

〈育苗・定植〉

種子が非常に細かいので箱または鉢まきにします。本葉3～5枚くらいで移植してやります。苗が3～4cmに伸びたら一度芯を摘み、側芽が3～4本出たら定植します。

〈肥 料〉

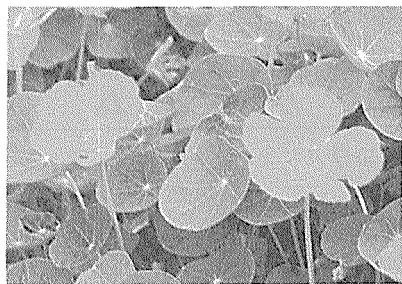
有機物が混入された用土であれば、肥料はほとんど必要ありません。追肥は、りん酸、カリを主体に施します。窒素肥料を多く施すと、茎葉ばかりが茂って草姿が乱れ、花つきも悪くなりますので注意します。

〈手 入 れ〉

真夏の夏バテ、時期に、花ガラ摘みと整枝をおこない、その枝先をさし芽してふやすのもおもしろいものです。15℃の適温下では、約10日間で発根します。

〈病 害 虫〉

病害虫は少ないのですが、ときに発生する斑点性病害には、ベンレート水和剤を散布します。また乾燥時によく発生するアブラムシには、マラソン乳剤、オルトラン、スミチオン乳剤などを、ハダニには、殺ダニ剤で定期的に駆除します。



キンレンカ

- ナスタチューム
- ノウゼンハレン科
- 春まき 1 年草
- 開花期 6 ～10月

〈種 類〉

南米生まれのキンレンカは、長いつる、ハスのような形の葉、カラフルな赤や黄色の花が特徴で、目にも鮮やかな草花です。

キンレンカには、つるが2～3 mにも伸びる在来のもつる性種のほか、改良されてつるが伸びない矮性種もあります。プランター植えや花壇の縁どりに最適です。

〈性 質〉

春から秋まで咲き続けますが、冷涼地でないと夏の間、花がつきにくいという欠点があります。つまり夏の暑さや乾燥に弱いのです。

〈種 ま き〉

やや高温発芽性のため、本県では5月に入ってからまくのが確実です。

〈育苗・定植〉

直まきが向いていますが、移植する場合、本葉5～6枚くらいの間で、鉢または花壇に定植します。やせた土地でも十分育ちます。

〈肥 料〉

肥料は、ほとんどいりません。むしろ肥えた土地では、葉ばかり茂って花つきがきわめて悪くなります。窒素肥料を控えめにし、りん酸肥料を多めに与えます。

〈手 入 れ〉

本葉6～7枚のとき摘芯し、分枝を促してやります。また夏場は、十分かん水し、適当につるの整理もしてやります。

〈病 害 虫〉

病害虫は、比較的少なく、時々つくアブラムシを駆除してやる程度です。

〈楽しみ方〉

横に広がる性質を生かして、芝生の中の円形花壇に配植したり、プランター植えにして垂らして仕立てるのにもおもしろい草花です。



ペチュニア

- ツクバネアサガオ
- ナス科
- 春まき1年草
- 開花期 6～11月

〈種類〉

多くの草花のなかで、とりわけ花色が豊富でしかも花期が長く群植したものが咲き誇るとたいへん華やかになるのが特徴です。

和名をツクバネアサガオとよんでいるこのペチュニアは、ブラジル語のペチュン(Petun: タバコ)にちなんでつけられた名称であり、草丈は20cm前後で、自然に枝が分かれ、花は和名のとおりアサガオに似ています。

〈性質〉

高温多湿に弱くて、冷涼な気候を好む性質があります。ペチュニアの花芽は、短日で分化し温度20～25℃の長日下で開花します。

〈種まき〉

4月上・中旬にたねまきして7月上旬からの夏花壇への利用か、7月上旬にたねまきして9月中・下旬からの秋花壇利用もおもしろいものです。

〈育苗・定植〉

発芽後、本葉が出ない間に仮植します。本葉6～7枚で株間を20～30cm前後として定植します。

〈肥料〉

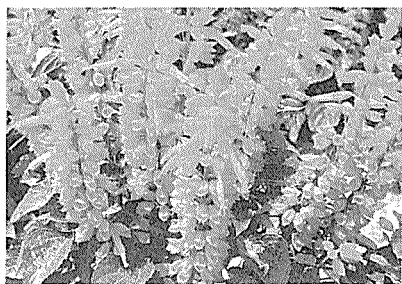
肥料を十分に与えることが長く開花させるためのポイントです。元肥には、有機質肥料を、追肥には、開花後、市販の化成肥料を月に1～2回程度、与えてやります。

〈手入れ〉

花が咲き終わったものは、できるだけ早く花ガラ摘みをし、あわせて整枝を行います。夏の終わりに株を10～15cmに切り戻してやりますと、やがて新芽が出て、秋には再生します。

〈病虫害〉

雨に弱く、花卉がぬれると病気になりやすい性質をもっています。ウイルス病、灰色カビ病、ウドンコ病などがあり、害虫では、アブラムシ、ハダニ、ヨトウムシ、ナメクジなどに食害されます。ベンレートやダイセン等の殺菌剤、マラソン、ディブテレックスのような殺虫剤で予防してやります。



サルビア

- ヒゴロモソウ
- シソ科
- 春まき1年草
- 開花期 6～11月上旬

〈種類〉

秋空に燃えるような真紅のサルビアは、まさに私たちの心をとらえてくれます。原産地では冬越しする多年草ですが、日本では温室にもちこめば冬を越すことができますが、通常春まき一年草として扱っています。花壇はもちろんですが、プランター植えにも適しており、夏から秋にかけての花壇には欠かせないものです。

〈性質〉

元来はコスモスと同じく短日植物で秋にならないと咲かない草花でしたが、近年早咲き種が多くなり、長日下でも花をつけるようになりました。

〈種まき〉

発芽適温が20～25℃ですから、5月以降にたねまします。7～8日間で発芽します。

〈育苗・定植〉

発芽後は、本葉が出始めたら一回仮植して、苗を育て本葉6～8枚のころに定植してやります。日当たりと水はけのよい場所に間隔を十分とって植えます。

〈肥料〉

基肥に、堆肥、鶏糞などの有機質肥料を施してやります。生育期間が長いので月に1回、追肥として化成肥料を施します。

〈手入れ〉

秋によい花を咲かせるために、8月上・中旬の夏バテ時期にいちど花穂を摘みとり、かるく切り戻してやります。そのあと追肥してたっぷりとかん水してください。1カ月後には再生します。

〈病虫害〉

通風が悪いとウドンコ病やアブラムシ、ハダニがよく発生します。ベンレート、ダイセンそしてマラソン剤で早めに駆除します。

〈楽しみ方〉

花壇のほか、プランター植えにしてベランダや窓辺において楽しむのもよいものです。また、刈りこみした枝をさし芽してふやし、鉢づくりにして楽しむこともできます。



インパチェンス

- アフリカハウセンカ
- ツリフネソウ科
- 春まき1年草
- 開花期 7～11月

〈種 類〉

夏から秋にかけての花壇で、よく見かける花色の鮮やかな草花です。和名をアフリカハウセンカとよんでおり、ハウセンカの仲間なのです。最近は品種改良が進み、花色も多彩になっています。

現在、栽培されている品種は、ほとんどが一代交配種で、草姿や開花のそろいもよく、早咲きの矮性種です。

〈性 質〉

インパチェンスは、高温と半日陰下でよく育ちます。また温室で育ててやれば、多年草のように周年開花します。ただし越冬には、8℃以上の温度が必要です。

〈種 ま き〉

温室があれば早まきも可能ですが、ふつうは5月に入ってからたねまきします。

〈育苗・定植〉

本葉が2～3枚のころ、育苗箱に移植し、その後は直射日光をさけて管理します。本葉6～8枚である程度の株間をあけて定植します。最終的には30cmの株間をとります。

〈肥 料〉

肥料は少なめに与えるのがよく、インパチェンスは、窒素肥料分が多すぎると花つきが悪くなります。

〈手 入 れ〉

花ガラ摘みと整枝は大切な作業です。花を一斉に咲かせるためには的確に、切り戻しを行う必要があります。真夏の時期に株を3分の1程度刈り込んで更新しても1～2カ月後には再び鮮やかな花が咲きます。

〈病 害 虫〉

ナメクジによる食害やネマトーグ(セン虫)もよく寄生します。土壌消毒を念入りにおこなってください。そのほか、ウドンコ病、サビ病、斑点病などがあり、予防が必要です。



マツバボタン

- ヒデリソウ、ツメキリソウ
- スベリヒユ科
- 春まき1年草
- 開花期 7～9月下旬

〈種 類〉

マツバボタンはブラジル原産の草花で、日当たりがよければ多少のやせ地や乾燥地にでも非常によく育ちます。葉は多肉で茎はよく枝分かれして地面をはい四方に広がります。ボタンを小さくしたような花が無数に咲き、夏の日照りにもおとろえません。

夏の炎天下でも、平気で花を咲かせるのでヒデリソウともいわれ、爪で切っさせば簡単に根づくところからツメキリソウともよばれています。

〈性 質〉

乾燥には強いのですが、過湿に弱いようです。花は半日花で、朝開花して昼には閉じる性質がありますが、最近、夕方まで咲く終日咲き種もあります。

〈種 ま き〉

たねまきは、5月から7月ごろまでで、5月上旬からまきはじめるとよいでしょう。

〈育苗・定植〉

発芽して、苗が指でつまめるようになったら、一度仮植してやります。花壇は日当たりのよい、排水良好なところを選びます。定植間隔は、15～20cmとし、あまり密植しないことです。

〈肥 料〉

特に生育が劣る場合にのみ、化成肥料で追肥します。

〈手 入 れ〉

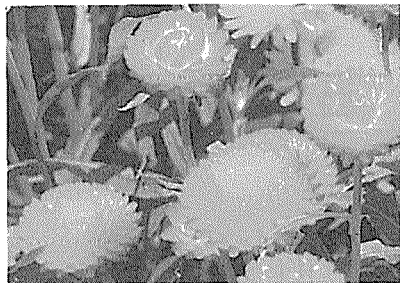
ときどき長くなった側枝を摘んで株張りをよくしてやります。

〈病 害 虫〉

病害虫は、ほとんどありません。幼苗の時は、過湿になると腐りやすいので注意が必要です。

〈楽しみ方〉

茎が地面にはうようにして茂りますので、花壇の縁どりなどには最適です。日当たりのよいテラスのまわりや園路に沿って細長く植え付けすると、たいへんきれいなものです。



ムギワラギク

- ヘリクリサム
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 7～10月

〈種 類〉

ムギワラギクは、明るく輝く光沢をもち、色彩が豊かでドライフラワーの代表としてよく知られていますが、これは花弁にふれるとカサカサと乾いた音を立てるほど水気がなく、よく乾かした麦ワラで作った花のようにみえるところからこの名がつけました。

一般には、カイザイクという名でよばれていますが、正式には属がちがっており、別種のものです。

〈性 質〉

一度作るとこぼれだねで生えてくるほど育てやすく丈夫な草花です。比較的耐寒性もあるところから、暖地では越冬も可能ですが、本県では春まきのほうがよいでしょう。

〈種 ま き〉

発芽適温が20～25℃と高いので、4～5月にたねまきします。

〈育苗・定植〉

発芽日数は10日前後、本葉3～6枚のうちに間引きし、本葉8枚で定植します。日当たり良好で、やや湿気を含んだ肥よくな場所を選びます。

〈肥 料〉

たいへん吸肥力が強いので、肥料分の多い圃場は基肥なしで始め、生育状況をみて化成肥料を追肥します。

〈手 入 れ〉

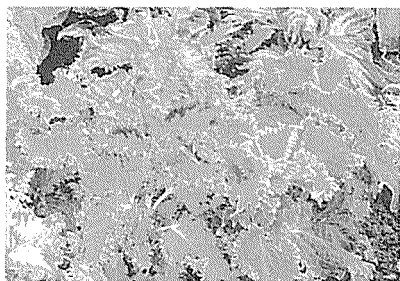
かん水はできるだけ控えぎみとし、多湿にならぬよう注意します。開花をそろえるため、伸びはじめた時点で摘芯をします。草丈が伸びたら、支柱立てをして倒伏しないようにします。

〈病 害 虫〉

密植したり、窒素肥料分が多いと立枯病が発生します。オーソサイドをかん注するかベンレートで消毒してください。アブラムシ、ヨトウムシ、アオムシにはDDVP、オルトランを散布してやります。

〈楽しみ方〉

ドライフラワーとしても楽しめます。



コ リ ウ ス

- キンランジソ
- シソ科
- 春まき1年草
- 開花期 7月上旬～10月

〈種 類〉

葉色が赤、黄、緑、ピンクなどと美しい錦模様を描き、鮮やかに色づくいわば一年生の観葉植物です。葉の形はシソに似ており半日陰の庭先にもよくマッチします。近年、品種改良が進み多彩な葉色や葉形の変化に富む園芸品種が作り出されています。

〈性 質〉

夏の強光線下よりは、半日陰の場所をむしろ好む植物です。湿り気の多い日陰でよく育ち、水々しくて美しい葉色が楽しめます。

〈種 ま き〉

たねは、細かいのでまき箱にいてねいにまきます。高温(20℃以上)を好むのであるべく暖かい場所がよく、5月に入ってからまくと苗作りは容易です。

〈育苗・定植〉

発芽して子葉が展開したら、箱または地床に仮植します。本葉が5～6枚になれば、25～30cmの間隔で花壇に定植します。

〈肥 料〉

窒素分を多くすると葉色が悪くなりますので、りん酸分を多く施すのがコツです。1㎡当たり50gの化成肥料を元肥とし、月に1～2回程度、追肥します。

〈手 入 れ〉

夏場の乾燥を防ぐために、表土に堆肥を加えたり、敷きワラをしたりします。乾燥時には十分にかん水すること、花穂を除去すること、切り戻しをして側枝を多く出させることがポイントです。

〈病 害 虫〉

葉を犯す斑点性の病気には、早めにベンレートを散布し、アブラムシやハダニには、マラソン乳剤やカルホス乳剤が効果的です。

〈楽しみ方〉

摘芯して株が茂ってくれば、7～8cmのわき芽を摘んでさし芽してやります。室内での水栽培やテラリウムの材料としても利用できます。また吊り鉢として楽しむのもおもしろいものです。



ベゴニア・センパフローレンス

- シキザキベゴニア
- シュウカイドウ科
- 非耐寒性多年草
- 開花期 5～11月

〈種 類〉

ベゴニア・センパの名で知られているこの草花は、ブラジル原産の植物です。今日では、夏から秋にかけての花壇には必ずといってよいほど使われています。本来は、温度条件さえよければ一年中開花するもので、センパフローレンスという言葉は、`周年開花する`という意味をもっているのです。和名をシキザキベゴニア(四季咲き性である)といい、数多いベゴニア類の中で、最もポピュラーな花ベゴニアです。また、わが国で古くからなじみ深いシュウカイドウの仲間です。

〈性 質〉

熱帯性の草花ですから、寒さに弱く、霜にあうと枯死します。四季咲き性というものの、冬の寒さが厳しい本県では、露地での冬越しは無理です。

〈種 ま き〉

発芽適温は20℃で、発芽に2～3週間を要します。4～5月上旬がまき時です。

〈育苗・定植〉

本葉が2～3枚になったら、鉢または、箱に仮植してやります。ベゴニア苗は、茎が伸びず平たく葉が出ますのではしや竹ベラでていねいに根もとを押さえるようにして植えます。花壇への定植は、日当たりがよく、排水良好で腐植質に富む場所を選びます。

〈肥 料〉

開花期間が長いため、途中`肥料切れ`することがあるので、基肥は緩効性肥料を施し、また月に1～2回化成肥料を追肥するかかん水がわりに液肥を1,000倍程度にうすめて施します。

〈病 害 虫〉

灰色かび病やウドンコ病が発生します。こまめに花ガラ摘みをし、ダイセンやベンレート剤で防除し、多発する茎腐れ病はバシタック剤で防除します。



アサガオ

- ケンギョウカ
- ヒルガオ科
- 春まき 1 年草
- 開花期 7 ～ 9 月

〈種 類〉

清楚で可憐な花が真夏の朝を彩り、夏の風物のいわばシンボルともいえる草花がこのアサガオです。中国から薬用植物として渡来したのが始まりで、今から約1200年前の奈良時代から栽培が始まり、江戸時代においては数々の変化アサガオが作られたといわれています。つまり、アサガオは日本で非常に改良発達した草花です。

〈性 質〉

代表的な短日植物で、かなり高温を好む、つる性の春まき草花です。

〈種 ま き〉

高温発芽性の種子ですから、また非耐性で晩霜害も大きいので5月に入ってからまくようにします。

〈育苗・定植〉

発芽後3～4日で移植し、小さい鉢に仮植したかたちで育ててやります。7月上旬には、大きな鉢に植えかえたり、花壇に定植したりします。

〈肥 料〉

油かす5、米ぬか3、わら灰2を混合し、それを水で半練り状態として発酵させます。乾燥した肥料を大さじ一杯ぐらいずつ鉢に施し、蕾がみえはじめたら、液肥にきりかえます。大輪系では、追肥をしますが、洋種アサガオの垣根作りなどは施しません。

〈手 入 れ〉

つる性植物ですから、支柱やフェンスが必要です。

〈病 害 虫〉

アブラムシには、マラソン乳剤やスミチオン乳剤を散布し、ハダニにはアカルケルセン、テデオンなどの各乳剤の交互散布を行います。斑紋病には、ダイセンを散布します。

〈楽しみ方〉

大輪系や変化咲系は、鉢作りとし、矮性系はプランターや花壇で楽しめます。



ケイトウ

- セロシア
- ヒユ科
- 春まき1年草
- 開花期 8～10月

〈種 類〉

ケイトウといえばニワトリのとさかのような赤い花が最もポピュラーで、強烈な色彩の花が青空を背景に咲く姿は実にみごとなものです。まさに夏の草花という印象をもつものですが、その種類には、トサカケイトウ、ウモウケイトウ、ヤリケイトウ、タマケイトウなどがあります。

〈性 質〉

熱帯原産の春まき1年草で、その発芽や生育にはかなりの温度を必要とします。また、乾燥に強く、耐暑性の強い草花で、移植をきらいます。

〈種 ま き〉

比較的高温発芽性のため、5月中旬以降にたねまします。8月にまくと11月に咲いてくれます。

〈育苗・定植〉

できれば直まきして、間引いていくほうがよいでしょう。箱まきする場合は、薄めにまいて、本葉5～6枚で定植してやります。あまり大きくなってからの移植は、植え傷みの原因となるので注意します。

〈肥 料〉

m²当たり堆肥2～3kg、化成肥料50～70gを基肥として施し、7月頃までに化成肥料20～30gを1～2回追肥します。

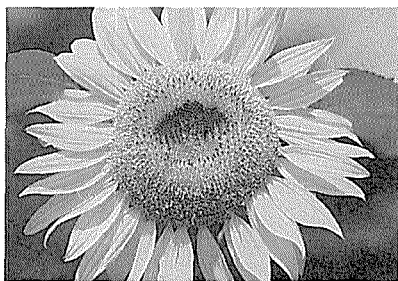
〈手 入 れ〉

直まきしたものは、倒れやすいので土寄せや支柱立てをします。

〈病 害 虫〉

根腐れ病や立ち枯れ病が出たら、その株を抜きとり焼却します。できるだけ連作を避け、タチガレン剤で土壤消毒しましょう。また褐斑病には、銅水和剤かダイセン水和剤が有効です。

害虫は、ヨトウムシやアブラムシですが、ヨトウムシには、ディプテレックスかサリチオン乳剤、アブラムシには、マラソン乳剤かスミチオン乳剤を定期散布します。



ヒマワリ

- ニチリンソウ、ヒグルマ
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 7～8月

〈種類〉

真夏の太陽に向かって大輪の花が咲くところから、英名をサンフラワー(太陽の花)といいます。ヒマワリの大きな花はいかにも夏むきの草花といえましょう。ヒマワリ属の植物は、約100種あるといわれ、系統、品種も多種多多彩です。

〈性質〉

どこでも栽培可能なのがこのヒマワリです。ただ、日当たりのよいところが大好きな草花です。

〈種まき〉

たねまきは4月中旬～5月に直まきするほうがよいのですが、床まきして移植してもかまいません。

〈育苗・定植〉

たねが大きいので、直まき作りがよいでしょう。30～40cm間隔で2～3粒づつ点まきしてやります。

〈肥料〉

腐植質に富んだ肥よくな場所を選びます。土が酸性にならぬよう石灰を100g/m²程度施します。直まきの苗が30cm以上に伸びたら、月に2回程度、液肥を使って追肥します。

〈手入れ〉

大きな花を咲かせるために、蕾を2～3個残して、ほかは摘みとります。

〈病虫害〉

害虫はあまりつきませんが、病気ではウドンコ病が発生しやすいので、早めにモレスタンやトップジンM等の散布で防除します。

〈楽しみ方〉

庭の背景として50～60cm間隔に群植したり、垣根などに列植すると見栄えがあります。



ヒャクニチソウ

- ジニア
- キク科
- 春まき 1 年草
- 開花期 6 月下旬～10 月

〈種 類〉

夏の暑い太陽のもと、けなげにも咲きつづけるヒャクニチソウは、夏を謳歌する花で、家庭でたねをまいて楽しむ草花の代表格といえます。その種類には大輪のダリア咲き、中輪のプミラ咲き、大輪で狂い咲きのカクタス、小輪でまり状のポンポン咲き、極小輪株立ち状で花壇に好適のジニア・リネアリス等種類は豊富です。

〈性 質〉

メキシコ原産の草花で、性質はきわめて強く、夏花壇には欠かせない春まき 1 年草です。

〈種 ま き〉

たねまきは、4～5 月がよいのですが、高温期ほど短期間で咲きはじめることから、夏まきをしても、秋にはきれいな花を咲かせてくれます。

〈育苗・定植〉

発芽後 1 回移植して、本葉 6～8 枚の時に定植します。日当たりがよくて、よく肥えた土地で、夏乾燥しない場所が適します。

〈肥 料〉

基肥には、できるだけ有機質肥料を多く施し、その後も月に 2 回程度、化成肥料で追肥してやりますと長期間、花を楽しめます。

〈手 入 れ〉

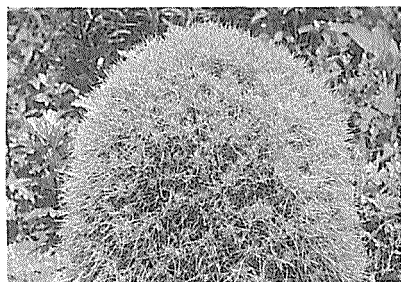
ヒャクニチソウの花を絶えず咲かせるには、開花して咲き終った花を絶えず摘み取ってやることです。この花ガラ摘みこそ、株を弱らすことなく次々と側枝を出させる秘けつです。

〈病 害 虫〉

ウドンコ病や斑点病、アブラムシやハダニがよく発生します。殺菌剤のベンレートやモレスタン、殺虫剤のDDVPやケルセン、アカール、モレスタンなどを定期的に散布します。

〈楽しみ方〉

矮性種は花壇に群植したり、鉢作りにしたりします。種類の多さから切花としての利用も増えています。



コキア

- ホウキギ
- アカザ科
- 春まき1年草
- 観賞期 8月下旬～10月

〈種類〉

細く先のとがった葉をつけ、こまかく分枝した高さ60～100cmのこんもりとした球状の株を作るのがコキアです。

夏は、緑すがすがしく、秋には枝も葉も紅葉します。生け垣や花壇の縁どりなどには好適な一年草です。秋には刈りとりて干し、束ねて、草ぼうきを作るのに広く利用されることから、ホウキギ、ホウキグサと名づけられました。

〈性質〉

日当たりのよい所であれば、どこにでもつくれる強い性質の植物です。

〈種まき〉

4月中旬に苗床にたねまきします。たねは、ホウレンソウに似ており、直根性ですので直まきに適していますが、移植も可能です。

〈育苗・定植〉

発芽後20日ぐらいで一度移植し、15cm以上になったら植え出します。水はけがよく、やや乾きぎみの日当たりのよい場所に適します。はじめ30～40cm間隔に株間をとり、植えてやります。

〈肥料〉

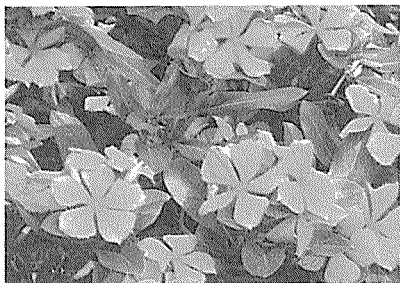
ごく控え気味に与えます。

〈手入れ〉

株の形を整えるには、7月ごろ枝先を軽く刈り込みます。また生育中に倒伏することがありますから支柱をしてやります。

〈楽しみ方〉

花壇の縁どり、生垣、ぼうき材料そして薬用植物として利用されています。



ニチニチソウ

- ビンカ
- キョウチクトウ科
- 春まき1年草
- 開花期 8～10月

〈種 類〉

真夏の草花として盛夏期の花の少ない時期の花壇や鉢植えそして切り花として広く利用されています。花は1日花ですが、夏から秋まで毎日次つぎに開花するので日々草といわれているようです。高性種と矮性種に分かれ、花色は、白、桃、濃桃、赤目などがあります。

〈性 質〉

マダガスカル、ジャワ、ブラジルなどの熱帯地方が原産地であるためか、高温を好む春まきの一年草で、直根性であり、移植をきらう性質があります。

〈種 ま き〉

発芽に20℃以上を必要とするので、たねまきは5月以降直まき又は箱(平鉢)まき→ポット育苗とします。

〈育苗・定植〉

直まきの場合は、発芽したら適宜間引きします。鉢栽培の場合は、本葉2～3枚で早めに仮植してやります。本葉が10枚前後になれば軽く摘芯し側枝を出させます。日当りのよい、排水良好な場所を選んで定植します。

〈肥 料〉

基肥には有機質肥料を与え、追肥は、月に1回程度、化成肥料を施します。あまり窒素が多いと花つきが悪くなります。

〈手 入 れ〉

花壇では、一回摘芯して側枝を出させますが、切り花用の場合は、摘芯せずにつくります。鉢ものは、日陰や過湿の場所に置かないよう注意します。

〈病 害 虫〉

葉を犯す斑点病には、早目にベンレートを、害虫ではウイルス病を媒介するアブラムシがよくつきますので、オルトラン、ダイシストン粒剤で駆除します。

〈楽しみ方〉

炎天をものともせず、また公害にも強い草花として、道路沿いのプランターやフラワーポットに最適です。



ハゲイトウ

- ガンライコウ
- ヒユ科
- 春まき 1 年草
- 観賞期 8 月中旬～10 月

〈種 類〉

ハゲイトウは、ケイトウの仲間で、一名アマランサスと呼び、わが国では、`雁来紅、ともいわれてきたものです。

花ではなく、茎の上部の発色した葉を観賞するものでバイカラー、ニシキバケイトウ、ヤナギバケイトウなどがあります。

〈性 質〉

生育適温が18～35℃で、耐寒性がなく、比較的高温でないと発芽しない熱帯原産の春まき 1 年草です。

〈種 ま き〉

発芽適温が比較的高温であることから、気温が十分上がった5月中・下旬にたねまきをします。

〈育苗・定植〉

直根性で移植をきらう植物なので庭や花壇に直接にたねをまき、必要に応じて間引きをしてやります。花壇の都合で移植が必要な場合は鉢まき育苗しておきます。

〈肥 料〉

6 月ころまでは、月に 2 回ぐらいの割合で化成肥料を与えますが、それ以降はほとんど肥料は必要ありません。特に窒素肥料を控えめにすることが葉の色づきをよくするポイントです。

〈手 入 れ〉

直まきの場合は、間引きが必要です。草丈が高くなるので場合によっては支柱を立ててやります。

〈病 害 虫〉

土から伝染する病気に弱く、連作すると立枯病になります。できるだけ連作は避け、葉の色づくころヨトウムシやズイムシに食害されることもあるので、マラソン乳剤やカルホス乳剤を散布します。

〈楽しみ方〉

花壇に群植して楽しむのが普通ですが、6 月以降たねまきして、鉢づくりするのもおもしろいものです。



ア ス タ ー

- エゾギク
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 7～8月

〈種 類〉

7～8月の頃、さまざまな花色の八重や一重の花を咲かせ、夏の切り花、特にお盆の花としてなじみの深い草花です。日本へ渡来したのは、江戸時代といわれ、水あげがよく、切り花として需要が多いことから改良が進みました。枝打ち型とほうき立ち型の2つのタイプがあります。

〈性 質〉

春まき1年草でありながら、暑さに弱いという性質があり、冷涼な気候を好みます。耐寒性があることにより、暖地では秋まき栽培も可能です。

〈種 ま き〉

4月中・下旬が、花壇用としてのまき時です。発芽適温は18℃で発芽日数は4～5日間です。なお種子は、消毒したほうがよいでしょう。

〈育苗・定植〉

いちど仮植したあと、本葉8～10枚のとき日当たり、通風、排水のよい土地を選んで株間15～18cm間隔に定植します。

また、定植の際、石灰を施用します。アスターは、大変連作をきらい、少なくとも3～4年は、同じ場所で作れません。

〈肥 料〉

有機質肥料を十分に施して、肥料を切らさないように注意し、追肥は、月に1～2回、化成肥料を施します。

〈病 害 虫〉

病気では、立枯病、いちょう病、斑点病、さび病にかかりやすいので、あらかじめ土壤消毒をおこないます。また連作をさけ、定期的にベンレートやダイセン、マンネブダイセンを散布します。

害虫としては、ウリハムシやズイムシ、ヨトウムシがつきやすいのでマラソン乳剤などで駆除します。

〈楽しみ方〉

矮性種は、花壇に最適です。高性種は、仏花としてなくてはならないものとなっています。



コスモス

- アキザクラ
- キク科
- 春まき1年草
- 開花期 6～11月

〈種類〉

和名をアキザクラと呼んでいるこのコスモスは、秋の季節になくてもならない花。わが国へは明治中期に渡来したものです。

極めて強健で栽培し易く、花壇に、切花に古くから親しまれてきました。その種類は、9月末頃から咲く秋咲き種、種をまいてから60日で開花する早咲き種、種類の異なるキバナコスモスなどがあります。

〈性質〉

こぼれ種で毎年自生するくらい強いが、全く耐寒性のない春まきの1年草です。とくに土質を選ばないが、日当たりと水はけのよい所を好み、肥料は控え目にすることが肝要です。

〈種まき〉

普通コスモス、キバナコスモスいずれも4月中旬～5月がまき時です。草丈を低くしたいときは、夏まきにします。

〈育苗・定植〉

直まきがいちばん簡単ですが、移植の場合は本葉3～4枚で10cm間隔に移植し、大きくなれば日当たりのよい場所に60～90cm間隔で群植します。

〈肥料〉

徒長しやすいので肥料はほとんどいらず、生育に応じてごく少量、追肥をする程度です。むしろやせた荒地のほうが花つきがよくなります。

〈手入れ〉

草たけが20cmくらい伸びたら、芯を摘みます。こうするとよく枝分かれし、秋まで咲き続けてくれます。また台風シーズンは倒伏しやすいので支柱立てや土寄せをします。

〈病虫害〉

病気の心配はありませんが、アブラムシやハダニがつきますので殺虫剤で予防します。

〈楽しみ方〉

草たけの高いものは、庭の背景に群植したり、垣根づくりにしても楽しめます。花壇への利用では、低く仕立てたもので密植します。またさし芽した苗を鉢あげして鉢ものとしても楽しめます。



ジギタリス

- キツネノテブクロ
- ゴマノハグサ科
- 春まき 2 年草
- 開花期 6 ～ 8 月

〈種 類〉

ジギタリスは、草丈50～130cmの美しい鐘状花をつける薬草です。古くから庭園に植えられ、葉を陰干しして粉末にし、強心剤としても利用されてきました。花として観賞価値もあることから、花壇に配植されたりします。大輪咲きの高性種と多花性の矮性種があります。

〈性 質〉

よく2年草として扱われていますが、本来は多年草扱いできるものであり、一度植えるとたねが落ちて自然に生えてくるくらいの強くて作りやすい耐寒性草花です。

〈種 ま き〉

適期は、5～6月、細いたねなのですまきします。

〈育苗・定植〉

10～15日で発芽するので、そのあと7～8cm間隔に移植します。夏場は半日陰で育苗します。9月中・下旬に日当たりと水はけのよい場所に株間30～40cmで定植します。

〈肥 料〉

月に1～2回程度、化成肥料を施します。

〈手 入 れ〉

一度植えれば、ほとんど手入れは必要ありませんが、花が終わったら花ガラを切りとってやります。

〈病 害 虫〉

病気としては、茎腐病と炭そ病、害虫はアブラムシが時々発生します。

〈楽しみ方〉

花壇の背景や中心に列植したり、群植すればおもしろいものになります。



フウリンソウ

- カンパニュラ
- キキョウ科
- 春まき2年草
- 開花期 5～7月

〈種 類〉

ラテン語でカンパニュラの語意は「小さい鐘状のもの」という意味であり、日本の山野に自生しているホタルブクロもこの仲間です。数多いカンパニュラの中で、フウリンソウは草丈1mほどの二年草で、春から初夏にたねをまくと、冬越しして翌春に開花します。正式名をカンパニュラ・メディウムといい、花壇や切り花用として広く利用されています。また、大型の鐘形花で、花色も桃、淡紅、白、青と豊富にあります。

〈性 質〉

あまり耐寒性がなく、本県のような寒冷地帯では、冬越しがむずかしいとされています。

〈種 ま き〉

5～6月に育苗箱にうすくばらまきするか、すじまきして、たねが隠れる程度に覆土します。

〈育苗・定植〉

本葉2～3枚で、仮植し、10月上中旬に日当たりと水はけのよい場所を選んで30cm間隔に定植します。

〈肥 料〉

堆肥か腐葉土を1㎡当たり2kg、化成肥料70gを基肥として施し、春以後化成肥料20g程度を2～3回追肥します。

〈病 害 虫〉

立枯れ病には、ベンレートやタチガレン剤を土壤灌注します。

〈楽しみ方〉

切り花のほかに、矮化剤(Bナイン250倍液)処理によって、鉢花としても楽しむこともできます。



タチアオイ

- ホリホック
- アオイ科
- 2年草または多年草
- 開花期 6～7月

〈種 類〉

直立した長い茎が数本に分枝し、フヨウに似た花を数多くつけて立ち並ぶタチアオイは、日本では万葉の昔から栽培されていたものです。英名をホリホックとって、一般によく知られています。学名のアルテアは、ギリシャ語「治療させる」に由来しており、文字どおり薬草としても知られています。タチアオイ属は東半球の温帯に約15種存在することが知られています。

〈性 質〉

耐寒性の宿根草の性質をもっており、性質は丈夫で強く、むしろ植え放しにしておいても枯れることはありません。

〈種 ま き〉

暖地では、秋まき(9～10月)に適していますが、本県のような寒冷地は、春まきし、翌年の6～7月に開花するパターンが確実です。

〈育苗・定植〉

たねまきすると約1週間ぐらいで発芽してきますから、本葉2～3枚になったら花壇に植えてやります。日当たりと排水がよく、それでいてあまり乾燥しない場所に株間30cmぐらいにして定植します。移植をきらうので、根を傷めないよう注意して植え込みます。

〈肥 料〉

基肥に堆肥などの有機質肥料を施し、追肥として化成肥料を与えます。

〈手 入 れ〉

通風を図り、十分にかん水をします。台風時には、支柱をするか風よけしてやります。

〈病 害 虫〉

ウドンコ病には、モレスタンやトップジンをアブラムシやハマキムシにはスミチオンやDDVPなどで防除します。



キンセンカ

- カレンジュラ
- キク科
- 秋まき1年草
- 開花期 4～5月

〈種類〉

キンセンカは、春から初夏にかけて咲く秋まき1年草の代表格といえましょう。学名のオフィキナリスは、`葉になる、'という意味をもち、古くから薬用植物としても利用されてきました。昔は、切り花として有名な早春の花でもありましたが、最近では矮性の種類が改良され、花壇用として広く栽培されています。黄、だいたい、赤のにぎやかな花を咲かせてくれます。

〈性質〉

耐寒性の秋まき1年草であるために、温暖な気候を好みます。したがって、寒さのきびしい本県では、秋まきよりも、春まきして夏に咲かせる方がより安全です。

〈種まき〉

まき時は、9月上旬ですが、早春に室内でたねまきするのもよいでしょう。たねは大粒でまきやすく、よく発芽してくれます。

〈育苗・定植〉

本葉2～3枚で一度移植し、ポリ鉢で苗を育てて、本葉6～8枚で花壇に定植します。キンセンカは、酸性土をきらいますので、土には必ず石灰を1㎡当たり200g程度混ぜて耕してから植えます。

〈手入れ〉

冬越しの際の敷きわらは防寒対策として有効です。

〈病虫害〉

苗のときにウドンコ病にかかります。トップジンやモレスタンで防除します。害虫では、アブラムシやヨトウムシが出やすいのでダイシストン、オルトラン粒剤を株もとにばらまきます。

〈楽しみ方〉

花壇に群植するのがもっとも美しいでしょう。プランター植えもよいものです。

2. 宿根草花

宿根性草花は、春のシバザクラやスズランから晩秋のツワブキまで、毎年、とくに手をかけなくても自然に土の中から出てきて、絶え間なく庭に豊かな色合いとポイントをくりひろげてくれます。

1. 宿根性草花とは

宿根性草花(宿根草)とは、永続的に、毎年、生長、開花、結実を繰り返す性質をもつ多年生草花です。多年生草花の中には、地下茎や茎・根に養分を貯えて休眠するものがあり、これらを球根草花類と呼んでいる。一般には、この球根草花類を除いた多年生植物のすべてを宿根草としています。

宿根草は、その性質別に大別すると、次のように分類できます。

◇地上部枯死型…冬期、地上部が枯れて休眠する。

ホトトギス、スズラン

◇ロゼッタ型……ロゼッタ形の葉をつけた小苗で越冬する。

キク、セキチク

◇常緑型……年中、葉を繁らせている。

オモト、シバザクラ

◇室内越冬型……冬、屋外では越冬できない。

マーガレット、クンシラン

ただし、この分類は、取扱い方によるため、地方によって異り絶対的なものではありません。

2. 宿根草の魅力

宿根草は、日本、中国、ヨーロッパの比較的温暖な温帯地方原産のものは、性質が強健で増殖し易く、極めて育て易い。一方、熱帯原産のものは耐寒性が弱く、冬期温室栽培を必要とする場合が多いものです。

(1) 花壇作りとして

宿根草は、永年的に、生育を繰り返すので、一度植えておけば、毎年花が咲いてくれるメリットがある反面、その多くは一季咲きであり、花が咲いているのは、1年のうち、1カ月以内のことが多く、その他の時期は葉ばかりとなります。そのため、一般花壇としては主役を1年草類とし、添え役に、宿根草を用いています。

しかし、毎年きまった季節に、きまった花がみられ、自然な草姿を楽しめるので、園芸愛好家の間で人気が高いものです。これを用いての花壇は、一般花壇と同様に、①群植花壇、②寄植え花壇、③境栽花壇が考えられます。これらの

花壇作りには、多くの宿根草の性質とその組み合わせによる効果についても、熟知している必要があります。そこに、宿根草の花壇作りのむずかしさがあると同時に、魅力があるわけです。

(2) 庭植えとして

宿根草は、1年草と異なり、あまり、人為的に改良されていない野趣を残した種類が多いので、庭の適切な所に、数株ずつ植え込んだ方が、山野草的な味わいを楽しめます。また、1年草よりも日陰性のもの(ユキノシタ、シュウカイドウなど)や、半陰地性のもの(ツワブキ、シラン、ギボウシなど)がかなりあるので、植え場所も、1年草類以上に広範囲に求められます。一方、地被植物(グランドカバー)として、洋風・和風いずれの庭にも用いられ、洋風の庭には、明るくモダンな感じのするものを選び、和風の庭には落ちついた渋みの素材を選びます。

(3) 鉢植えとして

古くから栽培されてきた宿根草のなかでも、フクジュソウ、サクラソウ、キクなど日本園芸草花の多くは、庭植え以上に鉢植えとしての利用が多い。花が咲く頃、各地で、愛好家による展示会が開かれ、それに合わせた品種改良や栽培法が考案されて、これが園芸の発展をうながしてきました。

3. 宿根草の育て方

(1) 植え時

植え時をまちがえると、よく根づかなかったり、その後の生育が悪くなったり、開花に至らないことが多い。植え時は、その種類によって次のように考えて決めます。

- 春咲き宿根草……原則として、前年の秋、9～10月が植えつけの適期であり、春植えにすると、根づいても花が咲かなかったり、咲いてもあとの生育の悪いことがあります。(ジャクヤク、ミヤコワスレなど)
- 夏～秋咲き宿根草類……原則として冬を越して春先きの4月頃、新芽が伸び始める前に植えるようにします。植え時が遅れると芽が伸び過ぎて植えいたみを生じやすいので適期をはずさないことが肝要です。(ホトトギスなど)
- 四季咲き宿根草類……ガーベラなどの四季咲き種は、夏～秋咲き宿根草に準じて春植えをするのがよい。(セントポーリアなど)
- 例外的なもの……宿根アヤメ類は、春咲き種に準じ秋植えでもよいが、花後、夏までの間に植え終るのがよい。フクジュソウ、サクラソウなどは、12～2月に、鉢植えができます。

(2) 場所

種類によっては、好む日照が異なるので、日当たり具合をみて、適切な場所を選ぶことが大切です。

- 日当たり地がよいもの(半日以上日の当たる場所)…… シバザクラ、シャク

ヤク、ハナショウブ、キキョウ、ガーベラ、キクなど

- 半日陰地がよいもの(半日以下の日照でよいもの)……オダマキ、シラン、スズラン、ギボウシ、ツワブキ、フクジュソウなど
- 日陰地がよいもの……ユキノシタ、シュウカイドウ、シャガ、ホトトギス、シダ類など

(3) 植え方

面積あたりの植え付け株数は、種類によって違い、アメリカフヨウのような大形のものは1㎡当たり1株、ギボウシなど中形のもので5～6株、シランなどの小形のものなら30株程度とします。植え付け後、十分に、灌水を行えば、その後、よほど乾かない限り灌水の必要はありません。

(4) 手入れ

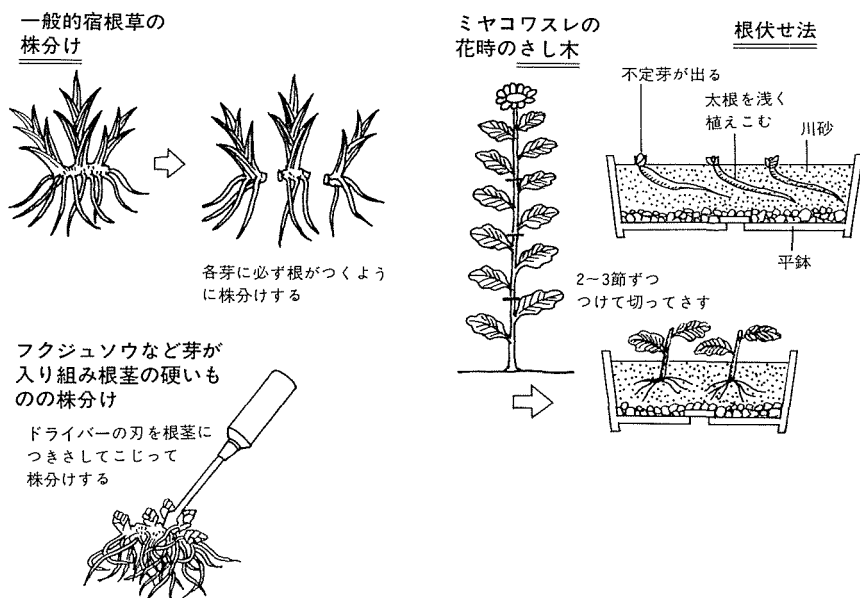
生長期には原則として月に1回程度追肥をしますが、花芽分化期1ヶ月ぐらい前からは施肥をしない方がよい。春咲き宿根草類では、花が終わった直後にお礼肥を施し、以後茂る茎葉を大切に、刈りとりたないように注意します。結実性の高いものは、採種株以外は結実させないように花がらを切り除きます。

4. 殖やし方

宿根草はいろいろな殖やし方ができますが、次のような方法が主に行われます。

(1) 株わけ

株元より多数出ている子芽を親株より切り分けて殖やす方法です。繁殖率は



それほど高くないが、株分けした苗は、初年度にほとんど、一人前に育って開花する最も確実な繁殖法です。株分けの時期は、ほぼ前述の植え時と同じ時期に行いますが、株元より子芽が多く出そう時期がよい。

(2) さし木

宿根草類のうち、茎立つ性質のものは、ほとんど、さし木でも殖やすことができます。一度に多く殖やしたい時には、このさし木繁殖を行います。

(3) 根伏せ法

根から不定芽を出すもの(オイランソウ、ニホンサクラソウなど)は、太根を切って、浅く横に寝かせて伏せこむとよく芽を出します。

(4) 実生

よく結実する種類では、いずれも種子繁殖ができますが、開花まで年数の要する種類では、品種改良以外は行われません。

● 手作りを楽しむドライフラワー ●

1. どんな花がドライフラワーに向くか。

ドライフラワーにするためにはどんな花でもというわけにはいきません。第一に、乾燥させても花の形が変わったり、くずれたりしないもの。第二に、花色が変色しないもの。以上二つの条件が備わった植物であることが必要です。

簡単にドライフラワーにできる植物としては次のようなものがあります。

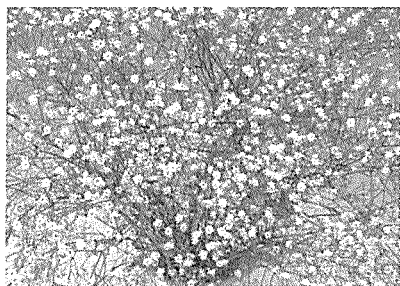
ヘリクリサム(帝王貝細工)、アクロクリニューム(姫貝細工)、千日紅、スターチス類、カスミソウ、ペニバナ、アリウム、ススキ、ガマの穂、コバンソウ、ワレモコウ。

2. 自然乾燥がいちばん簡単

薬品等を使わずに、逆さに吊しておくだけで作られる自然乾燥法は、時間がかかるが最も簡単な方法です。不要な葉は切取ってから、太いものは1本ずつ、細いものは数本を束ねて吊す。直射日光をさけ、なるべく風通しのよい場所を選んで、短時間で乾かすのがコツです。

3. 立枯れを楽しむ

自然に枯れた植物の姿を楽しむのも風情があります。花の終わった後のヒマワリ、ガクアジサイ、ヤマノイモ。実のはじけたアヤメ、ヒオウギなどの殻。山にあるツルウメモドキ、サンキライなど、探せば楽しめるものが沢山あります。



宿根カスミソウ

- ジブソフィラ
- ナデシコ科
- 開花期 6～9月

〈性 質〉

小さな花をたくさんつけて咲きそろう姿は、遠くから眺めると春霞を思わせませす。近年、この花の人気の高まり、フラワーアレンジには欠かせない花です。

原産地の条件からも酸性を避け、乾燥気味の土地を好み、排水のよい砂壤土や壤土を選び、高うねにして乾燥ぎみな条件で作るようにします。

一般に、四季咲きに八重のもの(プリストルフェアリー)の popularity が高く、栽培も多い。草丈120cmに伸びる主枝から、針金のように細くてかたい側枝を無数に出し、各先端に雪白色八重の花径1cm位の美しい小花をつける。白花のほか、桃色系もあり、近年はさらに濃色のレッドシーが出回っています。

繁殖は、現在、大部分が挿し芽によって行われています。

〈栽 培〉

日当たりと排水の良いところを選び、11月あるいは4月頃に定植します。施肥は1㎡当たり堆肥3kg、化成肥料60g～100g程度施す、徒長させないことが大切であり、窒素肥料は少なめにし、リン酸とカリ肥料を多くするようにして茎を硬く作る。又、石灰を1㎡当り200g程度施し、pH7に調整します。

植付けの間隔は、普通は90～100cmのうね幅で、株間を40～45cmとする。

1株から5～6本の主枝が繁茂し、高性種では倒伏する心配があるので、ます目の大きいフラワーネットを使用します。

〈病 害 虫〉

主な病害虫は、アブラムシ、スリップス、白絹病等で、虫類は早めに駆除し、白絹病は土壌伝染するので、抜き取りを励行し、PCNB剤等を灌注します。



キ　ク

- ヨワイグサ
- キク科
- 開花期　7～11月

〈性　質〉

菊は耐寒性の宿根草で夏菊以外、短日性植物であり、日が短くなる9～11月に開花します。花後、開花茎は枯れて、株元より越冬芽(冬至芽)を何本も出して越冬します。この冬至芽が春から生長して秋に花をつけます。

菊栽培の歴史は古く、極めて種類が多い。我国で改良された秋咲菊を総称して和菊と呼んでいます。大輪種(花径18cm以上)では厚物、厚走り、管物、一文字などがあり、中輪種(花径9cm以上)では江戸菊、伊勢菊、嵯峨菊、肥後菊など地方独特のものがあります。小輪菊は多花性で鉢物、懸崖作りなどに多く使われています。一方、欧米で改良された菊を洋菊と呼び、切花用のスプレー菊、鉢物用のポットマムなど、色彩的に豊富であでやかなものが多い。その他、日照時間に関係のない夏菊や秋咲き菊の最晩性種である寒菊があり、切花用として作られています。

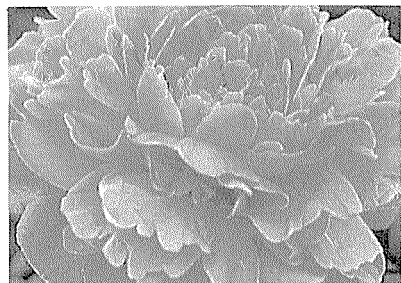
〈栽　培〉

4～5月にさし芽をして発根した苗を定植します。一方、夏菊は冬至芽を利用するとよい。日当たり・排水の良い所に植えますが、1㎡当たり堆肥2kg、化成肥料150g程度施して株間は15cmほどとします。

大輪菊や中輪菊(輪菊)は、定植後、摘芯を行い、そろった側枝を3～4本出させますが、懸崖作りなどでは、8月末までに4～6回位の摘芯を繰り返して側枝を多数出させるように仕立てます。また、輪菊は9月から側芽取りを行い、出蕾時には、側蕾を早めに摘み取ります。なお、繁殖は、株の老化をさけるため原則としてさし芽とします。

〈病　害　虫〉

かなり病害虫が多いので、防除をこまめに行うことが菊作りのポイントです。白錆病に特に注意が必要で、トリホリン乳剤などを予防的に散布します。



シャクヤク

- カオヨグサ、エビスグサ
- ボタン科
- 開花期 5～6月

〈性質〉

「立てば芍薬、座れば牡丹」といわれるように、シャクヤクの豊麗な花は美人にもたとえられ、古くから親しまれています。

耐寒性の宿根草ですが、根は肥大して塊根状となり、球根植物ともいえます。土質はあまり選びませんが、乾燥地では生育が悪く、充分保水力のある土地を好みます。日当たりはよいほどよく花をつけるので、栽培に当たっては、植え場所の選定が大切です。秋から新芽が生長して翌春開花し、花後地下部が生育肥大して夏に花芽を分化します。シャクヤクは花容に変化が多く、一重、八重、金しべ、翁咲き、冠咲き、手まり咲き、ばら咲きなどがあり、花色も、紅、桃、白のほか黄色種もあります。

〈栽培〉

シャクヤクは一度植え付けると4、5年すえおくので、透水性のよい土壌を選び、30～40cmまで深耕し、1株当たり堆肥3kg、化成肥料60g程度を施します。定植は、9月～10月が適期で、株間は50～60cmとし、芽の上に3～5cmの覆土を行います。非常に肥料食いなので、融雪直後に芽出し肥え、花後の6月にお礼肥えとして、株のまわりに化成肥料を約30g施します。また、花後、秋まで茂る茎葉を切らずに大切にするのがポイントです。なお、繁殖は、株分けによります。

〈病虫害〉

疫病や斑葉病、菌核病が発生しやすいので、4～9月の間は定期的に殺菌剤を散布します。

＊ お祝いに贈る花

- ◇新築、引越し祝い＝華やかな明るい感じの花を贈りたい。ただし、真紅な花は火事を連想させるという理由で嫌われることがあります。
- ◇銀、金婚式＝お祝いごと全般にバラの花が贈られますが、金、銀にちなんだ名前のもものが喜ばれます。
- ◇長寿のお祝い＝紅白のバラの花束も一つのアイデア。お祝いの場合は奇数にして贈ります。



ミヤコワスレ

- アズマギク、ミヤマヨメナ
- キク科
- 開花期 5～6月

〈性 質〉

わび、さびの心を重んじる日本人には欠かせない花です。日本独特の花で、手に入りやすいこともあり、茶花としての需要が多い。また、切り花以外にも、鉢花、庭園、花壇などにも適しています。花色は白、紫、紅、桃等で、濃紫色が主体となり、4～6月に、20～60cmの茎の頂端に径3.5～4cmの可れんな花を3～5輪つけます。高性種はおもに切花用として栽培され、矮性種は鉢植えや花壇向けとなります。

〈栽 培〉

植え場所は水はけのよい半日陰を選び、西日の当たらない落葉樹の下などがよく、夏の高温乾燥に弱いので注意します。定植、植え替えは秋に行いますが、腐植質の多い弱酸性土壌(pH5.5程度)がよく、PH6～6.5になると生育が悪くなります。基肥を9月上旬頃まで有機質肥料を中心に施し、石灰質肥料(石灰窒素など)はさけます。

鉢植えも水はけのよい土を用いて秋植えとします。

株分けは秋に行い、すぐに定植します。さし芽は、5月上中旬に1節ごとに切って、砂、鹿沼土などにさします。

〈病 害 虫〉

白絹病は連作すると多発するので、連作をさけるとともに、PCNB粒剤6kg/aを施用します。高温下で発生するダニ類については、ケルセン、プリクトランなどの殺ダニ剤の交互散布を行います。

＊ お見舞いに贈る花

◇病氣見舞い＝刺激の強いものはさけて、やさしい風情の花がよい。匂いの強い花、散りやすい花、血を連想させる真赤な花は常識として贈らない。長期療養の人には、季節を感じさせる花もなぐさめになります。

◇おくやみ＝葬儀の日ばかりでなく、数日たってから、遺族をなぐさめる意味で花を贈るのも、思いやりの表し方とされています。



シャスターデージー

- キク科
- 開花期 5～7月

〈性 質〉

アメリカの育種家ルーサー・バーバンクが、1920年頃作り出した園芸種で、カリフォルニアのシャスタ山の名がつけられました。

シャスターデージーは、高さ30cm～80cm、下部の葉は花期には枯れ、中葉は、倒披針形で鈍い鋸歯があり、上部の葉は細くて小さい。茎は、太くて耐久性があり、切り花、花壇用に用いられます。花は大きく白色であり、早春に花茎が伸び出し、5月から7月にかけて開花する長日植物です。

普通は、清楚で美しい一重咲きが主体ですが、花もちや新奇性をねらった二重咲き、八重咲き、丁字咲きなどもあります。

〈栽 培〉

日当たりのよい壤土か粘質壤土地に適し、乾燥のはげしい場所はきらいです。性質は、強健で作りやすいが夏の高温にはやや弱く、また、連作をきらいです。大株は立枯れになりやすいので、春か秋に株分けして混みすぎないようにします。定植は、15～20cm×45cm株間の長方植えにするとよく、肥料は、基肥として、1㎡当り堆肥2～4kg、緩効性の化成肥料約100gを施します。その後生育状態をみて、追肥します。

繁殖は、株分けのほかに、さし芽、実生もできます。株分けは、株元に発生する新しい芽を1芽ずつかきとって植えます。また、腋芽を砂などにさしてもよい。種子は1㎡で300～400粒、発芽適温は15～20℃のため、早まきの場合は多少の保温が必要です。

〈病 害 虫〉

白絹病が発生しやすいため、株がむれるのを防ぐとともに、石灰を施し、連作を避ける。発生をみたら、直ちに病株を抜きとり焼却します。



スズラン

- キミカゲソウ
- ユリ科
- 開花期 4～5月

〈性 質〉

高原の森の中に、ひそやかに咲くスズランの花は、その快い香りとともにロマンチックな花として人気があります。幅広の葉の陰にかくれて、純白色ツボ状の小花が数輪垂れ下がって咲く姿はこのうえなく愛らしい。

半陰地性の宿根草で、群落状に植えるともっとも美しいので、午前中日の当るような庭木の根元などにたくさん植えておくと、自然風であり、花つきもよい。

スズランには、日本の中部以北の山地に野生する日本種とヨーロッパ原産のドイツスズランとがあります。日本種はやや小形で小輪、花数も少なく香氣もあまり強くありません。ドイツスズランは、大柄で葉は濃緑色、花は大きく花数も多い、香りも強くて、そのうえ、丈夫で栽培しやすいものです。また、この変種として、淡桃色のものや斑入葉種、あるいは八重咲種もあります。

〈栽 培〉

植付けは、一般に3～4月に行うが、植え場所は、排水のよい所を選び、腐葉土を多くまぜます。花つきをよくするためには、花後に株をよく太らせることが大切で肥料は花後から夏頃まで油カスや化成肥料(20g/m²)などを必ず追肥します。また、株の太りをよくするため、花後の葉を大切にします。葉を病害虫で傷めたり、夏の乾きで弱らせることもよくありません。敷わらをして乾燥を防ぎ、秋まで葉を青々と茂らせておきます。繁殖は株分けで行います。(11月あるいは3月ころ)

〈病 害 虫〉

葉を黒変枯死させる病気がでやすいので、敷わらを行いベンレートなどの殺菌剤を散布して防ぎます。



シバザクラ

- ハナツメクサ
- ハナシノブ科
- 開花期 4～5月

〈性質〉

春早くから5月頃まで、道路の縁や石垣などを一面にピンクや白の、サクラの花を小さくしたような、かわいらしい花がカーペット状に彩り、富山の水田ともよくマッチし、春の雰囲気を一層高めます。

茎葉は地面をはい、節から根を出して、株回り30～40cmくらいに広がり、濃緑色の葉が密生するもので、シバザクラの名は、この花の草姿にピッタリの感じです。寒さや暑さに強い常緑の多年草であり、丈夫で育て易く、一度植えておくと年ごとに株を張り、花つきがよくなります。また、日当たりを好み、主に、石垣土手、花壇に植えられるが、芝生がわりのグラウンドカバーにも適します。

〈栽培〉

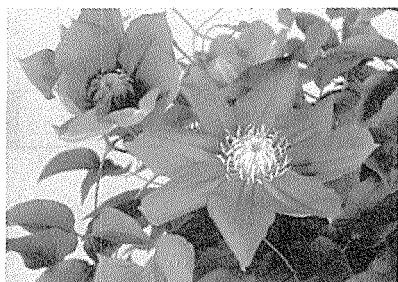
性質は強く、日当たりのよい場所であればどこでもよく育ちます。家庭では、春先に鉢苗を購入して定植しますが、数年後、株が大きくなってきたら、株分けして植え替えます。

繁殖は、株分けの他にさし芽もできます。秋に健全な茎を取り、4～5cmに切って水あげした後、発根ホルモン剤をつけて山砂やパーライトなどにさします。さし芽後は半日陰にして風を避け、湿度を保つと3～4週間で発根します。

さし芽や株分けで作った苗は、秋か早春に目的地に定植します。基肥として、㎡当たり化成肥料50～60g施しますが、追肥は、秋と早春、芽が出る前と、花後1回ずつ与えます。

〈病虫害〉

5～10月ごろまでは、ハダニがよく発生するので防除します。



クレマチス

- テッセン、カザグルマ
- キンポウゲ科
- 開花期 5～9月

〈性質〉

クレマチスは一般的に園芸植物名として用いられていますが、植物学的にはキンポウゲ科クレマチス属の一群の植物をさし、世界に約300種、日本には約30種が自生しています。

ふつうクレマチスといわれる種類は、中国産のC.ラヌギノーサ、テッセン、日本産のカザグルマ、ヨーロッパ産のC.ピチセラ、C.インテグリフォリアなどを交配してヨーロッパで作られた四季咲種です。

日本では、古くからテッセンとカザグルマは栽培されていましたが、ヨーロッパのクレマチスが紹介されたのは明治から大正にかけてです。

生育適温は20～25℃で、日当りを好むが、夏は高温を避ける意味からも半日陰にしてやりたいものです。水分は多い方がよく、乾燥させるのは厳禁で、鉢植えの場合は灌水に注意し、できるだけ通風のよい場所に置きます。また、根元の乾燥をきらうところから、ことに夏は根元に敷ワラなどをして保護してやります。

用土は、保水性・排水性のよい有機質に富み石灰分を含んだものを用います。

〈栽培〉

植え付けは、鉢植えの苗は冬期を除けばいつでもできますが、早春と晩秋に行うのがよく、1～2節深植えします。

剪定の方法は、品種により異なりますが、遅咲きの品種は早春に強剪定してもよいが、早咲きの一季咲き性の品種は前年枝にしか花芽がつかないので強剪定は禁物です。四季咲き性の品種は花後に開花枝を3～5節残して切戻すと60日ぐらいでつぎの花が咲いてくれます。

肥料は、3月と花後の5、9月に油かすと骨粉を等量混合したものなどを施すほか、生育期に液肥の1000倍液を2～3回与えるとよいでしょう。



アメリカフヨウ

- 宿根ヒビスカス、クサフヨウ
- アオイ科
- 開花期 7～9月

〈性質〉

園芸的に扱われる草花の中で、もっとも大きな花を咲かせ、草丈が1～2mになる大型耐寒性多年草です。北米原産で、わが国へは昭和初年に渡来したといわれています。花は一日の寿命しかありません。

米国内には多数の変異系があり、分類が統一されていないとされており、園芸上アメリカフヨウ、フランスフヨウと呼ばれている種のほか、ソコベニアオイの交配種やモミジアオイの血の入ったものなどがあり、品種も数多くあります。

日本や中国などを原産とするフヨウは、高さ1.5～3mの半耐寒性落葉木で、アメリカフヨウと同じアオイ科ヒビスカス属で、スイフヨウもこのフヨウの変種の一つです。

〈栽培〉

春に種をまくと8～9月には開花するので春まき一年草に分類する人もあります。株分けで簡単に繁殖することができ、発芽前の3月下旬～4月上旬に、茎を必ずつけて分けます。植え付けは、日当たりと通風がよく、夏にあまり乾かない場所を選んで、事前に堆肥を十分に混和しておき、40～50cm程度の大きな穴に根を広げるようにして植えます。

5月には萌芽してくるので支柱を立て、化成肥料を軽く1握りやります。その後も2週間に1度追肥をし、土寄せや敷ワラをしてやるとよいでしょう。夏の間の灌水は十分に行います。

鉢植えの場合は矮性種を選ぶとともに、C.C.Cなどの生長抑制剤を使用します。

〈病虫害〉

生育の盛んな梅雨期から9月にかけて、ハマキムシがよく発生します。この間は2週間に1度定期的にランネートなどの殺虫剤を散布します。また、予防策としてオルトラン粒剤などを株元にまいておきます。

根にネマトーダがつきやすいので植え替えは新しい場所を選ぶようにします。



ア ス チ ル ベ

- アワモリショウマ
- ユキノシタ科
- 開花期 6～7月

〈性 質〉

アスチルベと言われると「はてな、どんな花だったかな？」と思われますが、チダケサシ・アワモリショウマと聞くとピーンとくる人が多いと思います。アスチルベ属はチダケサシ属とも言われ、品種改良には日本原産種の血がかなり入っており、日本的な宿根草の一つともいえます。

アワモリショウマやアカショウマなどは古くから庭園に植えられており、栽培は容易です。日当たり・風通し・水はけのよい土地を好み、耐寒性もあります。種類によっては湿気のある半陰地に適するものもあります。

〈栽 培〉

3～4月に苗を購入して、腐葉土か堆肥を多目に混ぜた用土に植えます。肥料は化成肥料を開花前に2回、花後に1回程度施します。

株分けは3月ごろに行います。

鉢植えは、10月か3月ごろに3～4芽ついた株を5号鉢に植えます。用土は、赤玉土7：腐葉土3の割合で混合したものを用います。

〈病 害 虫〉

夏に株元から根にかけて白い糸がまつわりついたような白絹病が発生し、進行すると株は枯死してしまいます。連作をさけ、発病のおそれのあるときはPCNB水和剤(粉)を30g/m²施用して十分土に混和して植え込みます。また、発病初期ならば、株を掘り上げて罹病部位をPCNB水和剤液に浸漬後、新しい場所に植え替えます。

暖くなるとアブラムシやハダニが発生しますから、オルトラン粒剤や殺ダニ剤などを定期的に施します。

〈参 考〉

チダケサシは「乳茸挿し」の意味で、食用茸のチダケを採ったときこのチダケサシの茎にさして持帰ることに由来しています。



キキョウ

- キチコウ、オカトトキほか
- キキョウ科
- 開花期 6～9月

〈性質〉

シベリア、北部中国、朝鮮半島、日本に原産する1属(キキョウ属)1種の多年草で、古くから薬用や観賞用として栽培されてきました。

キキョウは秋の七草の1つに数えられ、万葉集の山上憶良の歌には「萩の花 尾花なでしこ 葛花 花瞿花わみなえしの花 女郎花ふじはかままた藤袴朝貌あさがおの花」とありこの朝貌がキキョウだとされています。(朝貌はムクゲだとする説もあります。)

花色は青紫で形は鐘形で浅く5裂した星形合弁が基本ですが、花色、花形には多くの変種があります。また、鉢物としても栽培されており、極矮性のアポイギキョウや鉢物用に改良された矮性の園芸品種などもあります。

いけ花にする時は、水あげが悪いので、根元を碎き塩をもみつけていけるとよいといわれています。

〈栽培〉

一般的には、春まきにして苗を作り秋に植え込みます。3月下旬ころにポリポットなどに3～5粒ずつ種をまき、間引きをし1本立として秋まで育てる。秋に、株間25×10cm程度を目安として、有機質の多いやや粘質がかった用土の場所に植え付けます。

3～5年は植えたままでかまいません。株分けは10月中・下旬に行います。

肥料は、化成肥料を1㎡当たり100g 2回程度施します。

アブラムシやハダニがつきやすいので、予防を兼ねて定期的に殺虫剤や殺ダニ剤を散布します。

〈参考〉

鉢植えてコンパクトにつくりたい場合は、春芽が5cm程度伸びたら地上2cm程度のところでピンチを行い、4週間程して側芽が1cm程度に伸びたらBナインの200倍液を散布し、その後20日おきに2度300倍液を散布します。



シ　ラ　ン

- シケイ
- ラン科
- 開花期　5～6月

〈性　質〉

日本原産の植物で、本州の関東以南各地や四国九州に自生し、中国や台湾にも分布していて、古くから栽培されているいわば古典園芸植物の一つといえます。性質は強健で耐寒性もあり花も美しいので、外国にも紹介されて花壇や切花用として広く栽培されており、一時富山県から盛んに球茎が輸出された時期もありました。

陽地、半日陰いずれの場所でもよく生育しますが、用土はやや重いものがよいとされています。乾燥に弱いので夏場の水やりに注意します。耐寒性があるので富山での冬越しは容易ですが、出芽時に遅霜に合うと芽先が傷むことがあります。ただし、花には影響ありません。

〈栽　培〉

植え付けは、葉が枯れる直前の10～11月に行うのがよく、花壇に植えてある場合は、花数が少なくなってきたら全部掘り上げて、新しい場所に植えるか、用土を更新して植えるようにします。肥料はあまり必要でなく、基肥に消石灰と腐葉土を施用する程度とします。

鉢植えの場合は、用土に赤玉土や鹿沼土など排水のよいやや重いものを数種混合したものに腐葉土を30%程度入れます。夏場の水やりを忘れないように。

〈楽しみ方〉

シランは花壇や鉢植えで楽しむばかりでなく、切花としても楽しむことができます。12月に球茎を掘り上げて15℃ぐらいの温室に入れると50日くらいで花が咲いてくれます。なた、普通種のほか、白色のシロバナシラン、花は白色で唇弁に紅色の斑が入るクチベニシラン、紫紅色花とシロバナシランとの交配によるフクリンシランなどがあります。その他にもいろいろな変り花が知られています。



ジャーマンアイリス

- ドイツアヤメ
- アヤメ科
- 開花期 5月

〈性質〉

風薫る5月に咲き誇る多彩な花色は「虹の花」にもたとえられ、アヤメ属の日本の代表がハナショウブとすれば、欧米でそれに相当するものがジャーマンアイリスです。このジャーマンアイリスは欧米の冷涼な乾燥地で改良されてきたために日本の高温多湿な気候がやや苦手です。

〈栽培〉

植え付けは6月から9月までできますが、梅雨期を避けて秋に行うのが安全です。場所は、半日以上日が当たり、通風と排水のよい所を選び、葉を切りつめた株を株間30cmくらいとり、根茎の背部が地表に出るように浅植えします。植え付け後数日間だけ灌水をし、それ以後は乾いても行いません。

無肥料でも育ちますが、基肥として骨粉と硫酸カリだけを施すようにします。また、弱アルカリ性の土質を好むので消石灰なども混入します。

2年目からはマグアンプKなどの遅効性の化成肥料や骨粉、草木灰を施します。

ジャーマンアイリスは植えて2～3年でいや地といって微量要素欠乏症状などを起こし生育が悪くなったり、花つきが悪くなるので2年に1度くらいは花の後に掘り上げて株分けをし、できれば3～4年で新しい場所に移すようにしてやりたいものです。

〈病虫害〉

葉がつけ根から突然倒れ、根茎がどろどろに腐る軟腐病や葉の元がゆでたようになって腐りだしてやがて褐色のアワ粒様の菌核が見られ、周辺にクモの巣状に白い菌糸がはびこる白絹病などが発生します。前者には銅水和剤がダコニールの病部への塗布、後者にはPCNB剤の灌注などがありますが、どちらにしても古い葉や雑草を除き、いつも根元が清潔で風通しがよいようにしておくことが病気予防上大切です。害虫ではアブラムシやネキリムシ、ヨトウムシなどがつきやすいので、スミチオンやオルトランを定期的に散布します。



ツワブキ

- トウゴ タクゴ
- キク科
- 開花期 10～3月

〈性質〉

葉に光沢があってフキの葉に似ていることから、艶葉落^{つやはぶき}といわれ、それが転訛してツワブキとなったとされている常緑の観葉植物です。東北地方の中部以南に分布していて、古くから庭園の下草や根締めとして栽植されてきました。俳句の季語はサザンカとともに初冬の花としてよく詠まれています。

〈栽培〉

半日陰を好み、夏の直射日光が当たらない場所で腐植質が多く水はけのよい用土を選んで植え付けます。肥料は少な目の方がよく、遅効性の肥料を施します。

植え付け期は、春と秋に葉をつけた根茎をていねいに株分けして植え、4～5年に1度株分けをします。

〈品種〉

葉に黄金色の斑点のあるキンモンツワブキや葉縁が波状のシシバツワブキのほか、白斑点や黄斑点のものなど多くの園芸品種があります。

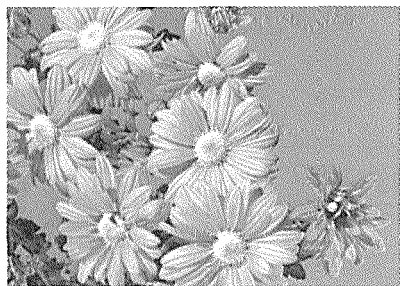
〈楽しみ方〉

ツワブキは古くから食用として利用されています。若い葉柄をキャラブキにしたり、乾燥して保存するほか、葉をあぶったりもんだりしたものがはれものや湿疹などの貼り薬として用いられています。

また、庭植え、花壇植え、あるいは切花用として、秋から初冬にかけて純黄の花と独特の光沢ある葉で親まれています。

＊花と家紋

主要な紋章の数は約300種といわれ、花の美しさや形のおもしろさが好まれたものなど、植物を図案化したものが最も多い。雑草としてのカタバミ、オモダカ、イタドリ、野草のセリ、ナズナ、ゴギョウ、また、スズナ、スズシロなども由緒ある家紋とされています。



シュウメイギク

- キブネギク
- キンボウゲ科
- 開花期 8～10月

〈性 質〉

日本原産の植物に思われがちですが、古く中国から渡来し、日本で野生化したもので、高さ50～80cmくらいの耐寒性多年草です。別名のキブネギクといわれるのは、京都府貴船山に多くみられたところからで、本州、四国、九州の山野、特に人里に近い郊外で農家やお寺の石垣などに自生しています。

性質はたいへん強く、やや湿った微酸性の土地の半日陰を好むが、あまり場所を選ばずよく生育しています。近年は一般の園芸鉢植えとして人気があり広く普及するようになりました。なお花卉のように見えるのは実はがく片です。

〈栽 培〉

一般的には、庭などに植えられていますが、半日陰のやや湿気の多い場所で、腐植の多い土地に適し、数年は株分けせずに栽培します。交配種は、夏に十分な灌水をすれば日当たりのよい場所でも作れます。

鉢植えの場合は、根の成長がとても活発なので、できるだけ大きな鉢に、赤玉土4、軽石4、腐葉土2など有機質を多く含んだ用土で植えます。

肥料は少なめがよく、植え付け時に緩効性の化成肥料(リン酸分の高い)を施し、春に油かすと骨粉などを追肥します。

株分けは、桜(染井吉野)が咲いたら、植え替えも兼ねて行います。また、露地植えの場合は地下茎が長く伸びて、思わぬところから新芽を出すことがあり、これを株分けする方法が簡単で確実です。

〈病 害 虫〉

害虫による葉の食害がよく見られます。新葉が出てから夏場にかけて定期的にマラソンなどを散布して下さい。また、シュウメイギクは冬期も葉を残して越冬しますが、融雪直後に庭木などに散布する石灰硫黄合剤をシュウメイギクにも併せて散布してやります。



ナ デ シ コ

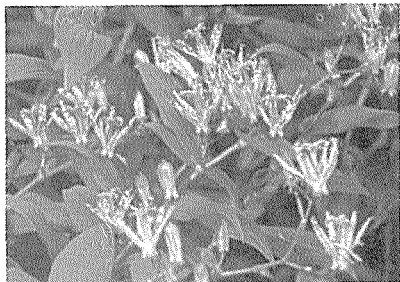
- ナデシコ科
- 開花期 5～10月

〈種類・性質〉

ナデシコは本来、日本の山野に自生するカワラナデシコ(ヤマトナデシコとも言う。)をさす名でした。セキチク(カラナデシコともいう。)が中国から渡来すると栽培種に名をとられてしまいました。江戸時代中期の園芸ブームの折、セキチクの四季咲き特性のものとしてトコナツ(常夏)が作出されました。また、セキチクとカワラナデシコの雑種をもとに伊勢松阪に住んだ紀州藩士^{つぐまつえいじ}継松栄二(1803～66)はイセナデシコ(ゴショナデシコともいう。)を作出しました。切花によく用いられるビジョナデシコ(ヒゲナデシコともいう。)は明治20年にヨーロッパから渡来した新参者です。花壇用ナデシコとしてタキイ種苗が育成した「テルスター」はビジョナデシコとセキチクの種間雑種F1です。タツタナデシコ(トコナデシコともいう。)も明治末にヨーロッパから渡来したもので、苗が長持ちするので石垣などに垂らすように植えてある姿をよく見かけます。

〈栽培〉

宿根ナデシコの各品種は、日本、中国、ヨーロッパの温帯に分布する野生種をもとに改良されたもので、気候によく合って丈夫なものです。繁殖は実生、挿し芽、株分けなどの方法があります。実生の場合、播種用土は赤玉土、鹿沼土の細粒でよく、育苗箱や5号平鉢を用いて2～3cm間隔にすじまきします。本葉4枚になったら移植し、株間を拡げハイポネックス2,000倍液を与えます。葉長7～8cmになったら8cmポットに鉢上げし、定植するまで株を養成します。春播きは90～100日で開花しますが、秋播きでは翌年の5月でないと花が咲きません。挿し芽用土はバーミキュライトの単用でよく、充実した側芽を切り取って水上げした後、発根ホルモンを切口に付けて挿し、湿度の保てる涼しい場所で管理します。20～30日で8cmポットに鉢上げし、定植まで養成します。肥料はI B化成S-1号がよく、1株につき3個ずつ月1回施してやります。アブラムシが付きやすいのでオルトラン粒剤で防除します。



ホ ト ト ギ ス

- ユリ科
- 開花期 7～10月(品種により花期は異なり、同一種の開花期間は20～30日)

〈種類・性質〉

ホトトギス属植物は東アジア～北インドに約20種が分布し、日本には12種あります。花は白地に紫色の斑点があって上向きに咲くホトトギス、ヤマホトトギス、ヤマジノホトトギス、セトウチホトトギス、花が黄色で紫褐色の斑点があって上向きに咲くタマガワホトトギス、キバナノツキヌキホトトギス、タカクマホトトギス、キバナホトトギス、チャボホトトギス、花が黄色の鐘形で下向きに咲くジョウロウホトトギス(別名トサジョウロウホトトギス)、キイジョウロウホトトギス、サガミジョウロウホトトギス(本種の地域変異種にスルガジョウロウホトトギス、カイジョウロウホトトギスがあります。)^{しのかめ}の3群に大別できます。育種改良は昭和初年より始まり、鈴木吉五郎氏がタイワンホトトギスとホトトギスの交配で作出した「東雲^{へきうん}」、「碧雲^{あま}」が有名です。最近の交配種ではタイワンホトトギスと白花ホトトギスの組合せによる「桃源^{とうげん}」、「藤娘^{ふじむすめ}」、「青龍^{せいりゆう}」、キバナノツキヌキホトトギスと白花ホトトギスの組合せによる「天の川^{あまがわ}」などがあります。

〈栽 培〉

地植えにはホトトギス(濃紫色花のもの、純白花のものなど多数の品種があります。)、タイワンホトトギスとその交配種、タマガワホトトギスなど茎が直立して高さ40～80cmとなるものが適します。腐熟堆肥を20ℓ/㎡ほどすき込んでフカフカの植え床を作り、1芽ずつに株分けして縦横とも10cm間隔に植え込みます。鉢植えには茎から5～30cmの高さとなる矮性種、キバナノツキヌキホトトギス、ジョウロウホトトギス類といった茎が長く下垂するものが適します。用土は硬質鹿沼土、赤玉土の米粒～大豆粒大のものを混合して用い、矮性種は平鉢、下垂種は腰高鉢に植え込みます。肥料はI B化成S-1号を1芽に付き1個、月1回ずつ施します。ヨトウムシの食害があるのでオルトラン粒剤で予防します。



ハナショウブ

- アヤメ科
- 開花期 5～6月

〈種類・性質〉

ハナショウブの原産地は日本、朝鮮半島、中国北部、シベリアの他、北アメリカやヨーロッパ東部といわれ、日本では原種のノハナショウブが信州、東北、北海道に多く自生しています。

伝えられるところによると江戸時代の中ごろ、みちのくの安積の沼に花かつみという美しい花が自生していたのを改良したのが今日のハナショウブであるといわれています。現在では1,000以上の品種がありますが、便宜上これらを江戸、肥後、伊勢の3つの系統に分けて扱っています。その他、アメリカなどでは、江戸系と肥後系の品種の一部を親として新品種が育成され、外国系とよばれています。

〈栽培〉

ハナショウブは日当たりと排水がよく、適度の湿り気がある場所を好む多年草ですが、同じ場所で長年作り続けるとしだいに生育が悪くなる傾向があります。いわゆる連作障害といわれるものです。

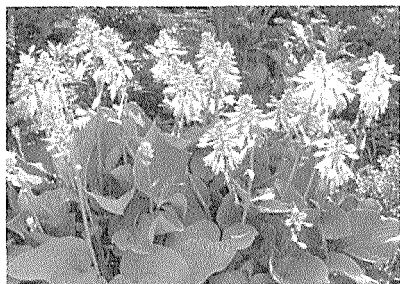
株分け、植え付けは開花後の6中～7月上旬に行います。株分けは2～4年に1回（鉢植えは2年に1回）、この株分けや植え替えをしないと芽ばかり増えて花が咲かなくなります。植え付けは浅く植えるのがコツです。

肥料は、基肥は入れずに植え付け後20日ぐらいたって根つき新葉が伸び出すころに乾燥肥料を月1回の割で与えます。また、敷ワラをなるべく厚く敷きつめると乾燥防止や夏の地温の上昇を抑え、雑草も少なくなるので必ず行います。

春先に発生するメイチュウ（ズイムシ）はオルトラン粒剤で予防します。

〈参考〉

アヤメ類の区別の仕方として、葉の中央に太い隆起のあるのがハナショウブ、隆起のないのがアヤメ、カキツバタ、イチハツ。葉の幅がせまく白粉をおびていればアヤメ。花の中央に縦に黄色の斑があればカキツバタ。さらに葉の幅が広く、花びらにとさか状の突起があればイチハツです。



ギボウシ

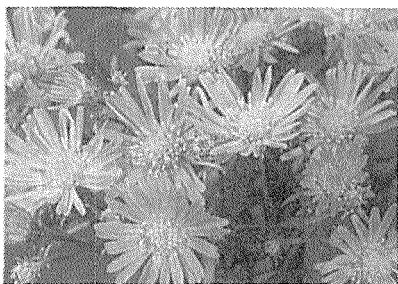
- ユリ科
- 開花期 5～10月(品種により花期は異なり、同一種の開花期間は20～30日)

〈種類・性質〉

ギボウシ属植物は日本、朝鮮、中国、ソ連沿海に38種が分布しています。江戸時代初めから庭木の根じめとして植栽されて来て、オランダ船でヨーロッパへ渡り、さらにアメリカ合衆国で種間交雑が試みられ現在では約1,000品数もあります。観葉物としては、大形(葉長30～60cm)のオオバギボウシ、トウギボウシ、トクダマ、中形(葉長15～40cm)のウナズギボウシ、ムラサギギボウシ、カンザシギボウシ、イワギボウシ、小形(葉長5～20cm)のコバギボウシ、ミズギボウシ、タチギボウシ、ヒメイワギボウシ、オトメギボウシ、ウバタケギボウシがあります。葉変わりが多く、覆輪、中透、縞などの斑入り品種が数多くあり、青葉であってもブルーを帯びるもの、粉白のもの、^{ちぢ} 捲れ葉のもの、^{こうりゅうば} 甲竜葉のものなどがあって、活花の葉物、観葉鉢物、グランドカバー等多用途に使うことができます。花物としては、早生で5月下旬～7月下旬咲きのキヨスミギボウシ、中生で7月中旬～8月下旬咲きのサクハナギボウシ、晩生で8月下旬～10月上旬咲きのハチジョウギボウシがあり、夜咲きの1日花ですが花の芳香が素晴らしいのがマルバタマノカンザシです。花色は淡紫がほとんどですが濃紫、純白の品種があります。

〈栽 培〉

鉢植えの用土は、赤玉土、硬質鹿沼土の米粒～大豆粒大のものを混合したものとし、株の大きさに合わせた鉢に植え込みます。地植えの場合は腐葉土を10ℓ/㎡程すき込んで平畦を作り植え込みます。肥料は5月と9月の2回、油粕と骨粉をねり合わせたものを3号鉢なら5g(2cm角の塊1ヶ)を、5号鉢なら20g、地植えでは200～300gを与えます。病害虫は春のアブラムシ、秋のネマトーダがあり、前者にはダイアジノン粒剤、後者にはバイデト粒剤を施して防除します。また、冬枯れた葉を取り除いて葉枯被害を予防します。



宿根アスター

- キク科
- 開花期 8～10月

〈種類・性質〉

宿根アスターは、添え花として重要な位置をしめてきたクジャクソウ(孔雀草)、古くから、一般家庭の庭先きに見られるユウゼンギク(友禅菊)、鉢物用としても人気の高いミケルマスデージー、最近話題のソリダスター(キリン草とアスターの交配種)と極めて多種です。これらは、開花期、花色、草丈そして草姿など、千差万別ですが、多くは、スプレータイプであり、小花が花径の頂点に多く開花します。耐寒性も強く、作りやすいので、今後、人気の出る花です。基本的には、短日植物であり、8～10月に開花します。

〈栽培〉

通常、4～5月定植としますが、ミケルマスデージーは秋植えが適します。本来、生育旺盛な宿根草であって、吸肥力は強く、とくに土地を選ばないものです。しかし、乾燥しすぎると、開花期に茎葉が黄緑色になるので注意します。

好適な土壌酸土は6～7ですが、石灰の与えすぎは禁物です。また、多肥栽培は、側枝の伸びすぎ、軟弱徒長となります。基肥として、化成肥料を60～100 g / m²程度施します。クジャクソウなどは、6月中旬に、地際部3 cmほど残すように刈り込み、生育をそろえ、強勢な枝を出させます。刈込み後、化成肥料を20～30 g / m²施すと効果的です。

〈病虫害〉

病虫害の発生が少ないことが特徴ともなっています。しかし、ウドンコ病、アブラムシ、ダニの発生がみられるので、早めに、殺菌剤、殺虫剤で防除します。



ミヤコワスレ



クレマチス



アメリカフヨウ



ハナショウブ



ジャーマンアイリス



シラン



アネモネ



クロッカス

スカシユリ





チューリップ



スイセン



グラジオラス



ダリア



ヒメシャガ



サギソウ



イカリソウ



フクジュソウ



ミヤマオダマキ

3. 球根草花

球根草花とは多年草のうちで茎、葉、根などが球状に肥大し、そこに翌年の生育のための養分と新しい芽を保持しているものです。一般に球根の形状と植え付け時期で、次のように分類します。

- ◇ 形状による分類：鱗茎、球茎、塊茎、地下茎、塊根、
- ◇ 植え付け時期による分類：春植え球根、夏植え球根、秋植え球根、

1. 植え付け、管理のポイント(共通的な)

- (1) 球根を選ぶ：大き目で硬く締まっている。病斑や傷がない、正しい品種。
- (2) 植え場所：日当たりがよい、耕土が深い、水排けがよい。
- (3) 畑づくり：植え付け10日ぐらい前に、予定の処に完熟堆肥 2 kg/m^2 、石灰 100 g/m^2 を与え、 $20\sim 30\text{ cm}$ の深さに耕す。数日後に化成肥料(N・P・K各 $10\sim 12\%$) 100 g/m^2 を与えよく耕す。
- (4) 植え付け：ダリア、カンナ等大株になるものは後述しますが、チューリップ、ヒヤシンス、グラジオラスなど鱗茎、球茎等は、植え付けの距離、間隔を球根の直径の約2倍とし、球根の高さの約3倍覆土をします。
- (5) 追肥：春植え球根では、大株で花期の長いダリア、カンナなどは月1回化成肥料 $30\sim 40\text{ g/株}$ 、その他の中、小球の種類は茎葉にかけないようにして、開花前1～2回、花後1回 $20\sim 30\text{ g/m}^2$ 、秋植球根は雪どけ直後1回 30 g/m^2 (夏植球根もこれに準ずる)

2. 球根の掘取り

- (1) 寒さに弱く必ず掘り上げて $7\sim 8\text{ }^{\circ}\text{C}$ ぐらいで貯蔵するもの(ダリア、カンナなど)
- (2) 分球数が多く、毎年掘り取って植え替えるもの(チューリップ、グラジオラス、球根アイリスなど)
- (3) 分球と肥大が緩やかで、3～4年そのまま栽培できるもの(スイセン、ヒヤシンス、ムスカリ、スノーフレークなど)



カ ン ナ

- ハナカンナ
- カンナ科
- 春植え球根
- 開花期 6～11月

〈種 類〉

カンナの野生種は熱帯アメリカ、アフリカ、熱帯アジアなどに分布し、これをもとにして園芸種が作出されました。高性種(草丈120cm以上)中性種(80cm前後)矮性種(60cm前後)や、緑葉種、赤葉種、斑入葉種などに分類されています。代表的品種としては、アメリカン・レッドクロス(赤花)アンアーファン(黄に赤小斑点)モンテイジン(紅赤、赤葉)タリスマン(黄に赤目)ホルトデイコック(朱紅色に中心部黄)などが知られています。

〈性 質〉

球根は地下茎の肥大したもので、枝分かれして広がりその先端から新芽を伸ばして生育し、次つぎに花をつけます。球根の耐寒性は弱い。

〈栽培・管理〉

- (1) 球根は傷のあるものや芽の欠けているものをさけて、大きくてみずみずしいものを選び、4月下旬から5月のうちに植えつけてやります。
- (2) 畑づくりは総論に準じます。球根の植えつけ間隔は60～70cmとし、図のように株分けした球根を、12～13cmの深さに穴を掘って平らに植えつけます。

追肥は総論に準じて行います。

- (3) 紋枯れ病の発生に注意し、病徴を見たらバシタック水和剤を散布し、葉にモザイク斑が現われる株はすぐに抜き捨てます。アブラムシ、ヨトウムシ、ズイムシなどにはスミチオンを散布します。

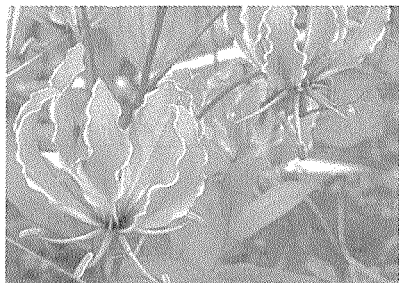
〈球根の掘り取りと貯蔵〉

晩秋になって薄霜に1～2度あったら茎を刈り取り、晴天の日に掘りあげます。2～3日乾燥してから土を落とし、発泡スチロールなどの箱に乾燥モミガラを十分に入れ、その中に埋め込みます。

冬の間8～9℃ぐらいのところに貯蔵して春を待ちます。

カンナの株分け





グロリオサ

- キツネユリ、ユリグルマ
- ユリ科
- 春植え球根
- 開花期 初夏から秋にかけて

〈種 類〉

グロリオサ・ロスチャイルディアナ(アフリカのウガンダ原産)は鮮橙紅色大花で花期も長く栽培も容易で、この属の代表として最も多く作られています。このほかにG・カーソニー(中央アフリカ原産)G・ルーテア、G・シンプレックス(熱帯アメリカ原産)G・スベルバ(熱帯アフリカ、アジア原産)などがあります。

〈性 質〉

球根は塊茎で、地上部は珍しく半つる性です。熱帯性のもので耐寒性が弱く、球根の越冬では保温に注意します。花は花卉の基部が細く切り込み後方に反転してユリの花を連想させます。球根は長さ5cm以上あれば開花し、大球では腐敗し易くなるので、5～15cmのものが適切とされています。

〈栽培・管理〉

- (1) 寒さを嫌うので、植えつけは霜の恐れがなくなってから行います。
- (2) 露地植えもできますが、一般に栽培管理の点から7号程度の鉢に2球植えます。植え終わったら直ぐに80cmぐらいの支柱をたてておきます。
- (3) 根は好気性で地表近くを伸び、乾燥害の心配もあるので、田土や赤土に腐葉土を容量の30～40%混合し、地表にも腐葉土や水苔を置くと効果的です。
- (4) 施肥は生育期間が長いので、効果の長い有機質肥料(練り肥えや乾燥肥料と言われるものであれば一層よい)や園芸用中粒の緩効性化成肥料がよい。

〈球根の保存〉

秋になって茎葉が黄色くなってきたら灌水をやめ、屋根下に入れて鉢土ともに乾燥させます。茎葉が枯れたらこれを切り取り、鉢共に3～5℃に保てる場所に春まで貯蔵します。また、露地植えや鉢植えでも量の多い場合は、地上部が枯れたら球根を傷つけないように掘り上げ7～10日間陰干ししてから、モミガラやオガクズと共に箱詰めにして3～5℃で春まで貯蔵します。

〈楽しみ方〉

鉢植えにしてのアンドン仕立て、鉢をフェンス沿いにしてこれにからませる。花壇一方にスクリーン状に仕立てるなど種々に利用する。



ダ リ ア

- テンジクボタン
- キク科
- 春植え球根
- 開花期 6～11月

〈種 類〉

ダリア属は、メキシコ、グアテマラの山地に12～15種が分布し、今日栽培されているものは、多くの原種の交雑で生まれたものです。一般に花径の大きさを巨大輪(26cm以上)大輪(20～26cm)中輪(10～20cm)小輪(3～10cm)極小輪(3cm以下)などと呼び、また、花形によって、シングル咲き、オーキッド咲き、アネモネ咲き、コラレット咲き、ピオニー咲き、カクタス咲き、デコラティブ咲き、ボンボン咲きなどにも分類します。

〈性 質〉

根が栄養を蓄えて塊根と呼ばれる球根を形成したもので、塊根上部の茎のつけ根(クラウンと呼ぶ)に芽が集まっています。四季咲性で生長しながら次つぎに開花するが寒さに弱く、冬は茎葉は枯れ、球根も凍って腐ります。

〈栽培・管理〉

- (1) 総論に準じて畑をつくり、降霜がなくなれば、芽を付けて分割した球根を1球宛て、大輪種は90cm、中・小輪・ボンボン咲き種は60cm間隔に、12～13cmの深さで横にねかせて植え、芽の近くにしっかりした支柱を立てます。
- (2) 追肥は総論に準じて行います。
- (3) 整枝は、ボンボン咲きや矮性種以外は、茎が伸びたら、下から3節位残して上部の脇芽を全部かき取ります。すると1番花が咲く頃下から3～4本の花茎が伸びてきます。これをまたその基部2～3節残して脇芽をかき取ります。なお、切花をとるときは、その枝の下方2節ぐらいを残します。このようにすると、下方から必ず花茎が伸びて花数を確保することができます。
- (4) 葉がちぢれ草丈が伸びないウイルス病株は抜き捨てます。また、アブラムシ、シンクイムシはスミチオン乳剤の散布やカルホス粒剤の土壌施用を行います。

〈球根の掘り取りと貯蔵〉

晩秋、薄霜に合ったら茎葉を地際から刈り取り晴天の日に球根を掘り上げます。土を払い、株の胴乾燥モミガラと一緒に7～8℃を維持できる場所(屋内、いも穴など)に翌春まで貯蔵しておきます。



リ コ リ ス

- ヒガンバナ科
- 夏植球根
- 開花期 夏から秋にかけて

〈種 類〉

リコリスはヒガンバナの仲間で、日本・中国の原産で10数種が分布し、そのうち6種はわが国に野生しています。開花期の順に代表的なものをあげると次のようです。キツネノカミソリ(7月下旬～8月上旬開花)ナツズイセン(8月上旬)リコリス・インカルナータ(8月中旬)L・スプレングリ(9月上旬)シロバナマンジュシャゲ(9月上旬)ヒガンバナ(9月中旬)L・アウレア(10月上～中旬開花、ショウキラン、ショウキズイセンの別名あり)

このほか園芸用交配種も数多く育成されています。

〈性 質〉

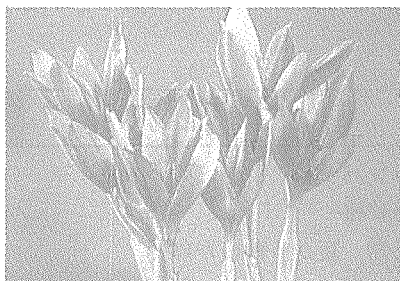
6花卉で強く反り返えるものと、あまり反り返えないものがあり、基部が漏斗状に着いています。葉の出る時期は開花と同じか直後のものと、秋に花だけ咲いて翌春に出葉するものがあります。前者は耐寒性の弱いものがあります。また、その球根は葉の基部に栄養を蓄えた鱗茎です。

〈栽培・管理〉

- (1) 植えつけ場所は特に選ばないが、排水よく、開花期には強光、乾燥を避け、出葉期には日照と適湿が必要なので、落葉樹下などを選びます。
- (2) 植えつけは開花前の葉が枯れているうちがよい。浅植えでは球根の肥大が劣って分球が多くなり、開花も悪くなるので、球根の高さ程度の覆土をしてやります。
- (3) 出葉時期に少チッソの化成肥料($N_{10}-P_{15}-K_{15}$ のような)を、 m^2 当たり100g程度葉に触れないように与えます。チッソ肥料が多いと球根腐敗が多発するおそれがあります。
- (4) 分球と植え替えは2～3年に1度行います。球根は掘り上げてでもできるだけ速やかに植えつけて、これを乾燥させないように努めます。

〈楽しみ方〉

リコリスの仲間は花が美しく花茎も長いので、花壇や植込みには好適です。後方から前方へと開花期の順に数種類を植え込んでおけば、その美しさを長期間にわたって楽しむことができます。



コ ル チ カ ム

- イヌサフラン
- ユリ科
- 夏植球根
- 開花期 8月下旬～9月

〈種 類〉

約60種がヨーロッパから中東、とくに地中海沿岸に分布しています。春、秋、冬咲きの3系がありますが、一般にコルチカムとして出回っているのは、次のような秋咲きのものです。コルチカム・オートムナーレ(ヨーロッパから北アフリカ原産)C・スベシオースム(カフカス、地中海東部沿岸、トルコ原産)、また、唯一の黄花種としてのC・ルテウム(ヒマラヤ原産)などがあります。なお、市販には幾つかの交配種があり、特に八重咲きのウオーターリリーが有名です。

〈性 質〉

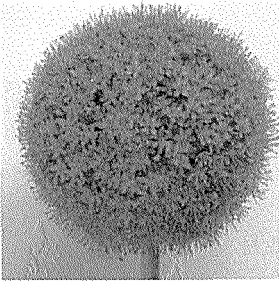
球根は茎の一部が変化して栄養を蓄えた球茎です。花は桃紫から白まで、中には唯一黄色種もあります。他の球根類と異なって、球根を掘り上げて乾燥したままでも秋には開花するので「土も、水も不要、室内で開花」と評判です。花後球根を植えておくと、翌春オモトのような大きな葉を出します。

〈栽培・管理〉

- (1) 花壇作りでは、その場所の選定や畑づくりは総論に準じて行います。
- (2) 植えつけは、8月下旬～9月上旬頃、球根の頂部から白く太い芽が見え始めたら、植えつけの間隔を球根の直径の2倍くらいとし、その上に10cmぐらいの覆土をしてやります。
- (3) 翌春大きな葉だけを出して生育しますが、病害虫の心配はほとんどありません。
- (4) 葉が黄色くなってきたら、晴れた日を選んで球根を掘り取ります。新球根は通常2個着いています。土をよく落として、球根の首の部分から2～3cm上方で葉を切り落とし、屋根下の日陰で通風乾燥して秋まで貯蔵します。

〈楽しみ方〉

室内での「土なし、水なし、球根のままでの開花」も趣のあるものですが、露地の自然光のもとで鮮やかな桃紫色の大花を開く花壇づくりがコルチカムの花の良さを最高に現すものです。



アリウム

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4～5月

〈種類〉

アリウム属は北半球だけに約300種が分布し、大球性と小球性に分けられます。大球性ではフットボールのように大きく紫色の花房のアリウム・ギガンチューム、やや小さいA・ローゼンバックナム、葉が美しく矮性のA・カラタビエンセ、線香花火のようなA・シューベルターなど、小球性ではA・モーリーは黄色い花でニラ臭く、A・スファエロセファラムは和名で丹頂と呼ばれています。

〈性質〉

葉が変化して栄養を蓄える鱗茎と呼ばれる球根で、大小はあるがいずれも耐寒性の強いものです。

〈栽培・管理〉

- (1) 植えつけ場所の選定や畑づくりは総論に準じて行います。
- (2) 10月上旬～11月初旬に植えつけます。植付け間隔は、大球性のギガンチューム、やローゼンバックナム、シューベルターなどでは40cm、その他は20cm位とし、10～15cmの覆土をしてやります。また、小球性では球根の直径の3倍位の間隔でその上に球高の2倍程度の覆土を行います。
- (3) 病害虫の心配はほとんどありませんが、茎葉の葉縁が濃淡モザイク状になるウイルス病株は、伝染源となるので見つけ次第抜き捨てます。
- (4) 花を眺め終えたら花首から摘んで球根の肥大を図ります。刃物を用いるとウイルス病が伝染するので、手で折りとってやります。シューベルターは種を採って繁殖するので摘花しません。
- (5) 葉が枯れたら掘り上げて日陰で通風乾燥し、土を払い茎葉を除いて、秋の植えつけ時期まで物置きなどで乾燥貯蔵しておきます。

〈楽しみ方〉

花色の相違、草丈の高・中・低の変化など花壇用としておもしろく、また、矮性で葉に趣のあるカラタビエンセは、鉢植えやプランター植えに適し、スファエロセファラム(丹頂)は曲作りが楽しい。高性大輪のアフラチュネンセは乾燥花としても優れています。



シ ラ ー

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4～5月

〈種 類〉

園芸上シラーと呼ばれているものは、スキラ属とエンディミオン属を含んだもので、欧州、アフリカ、アジアの温帯に80～90種が分布しています。

これらのうち代表的なものは、シラー・シビリカ(鮮紫、薄紫や白もある、鐘形、小花、草丈約10cm) S・チュベルゲニアナ(水色に青の中筋) S・ベルビアナ(濃紫、白色、小花数十輪が上向き傘状に着生、草丈約30cm) S・ヒアキントイデス(青紫、草丈50cm) S・ノンスクリプタ(青紫色、鐘形、草丈50cm) S・ヒスパニカ(別名S・カンパニュラータ、青、白、ピンク、鐘形、草丈40cm)などがあります。

〈性 質〉

いずれも耐寒性の強い球根(鱗茎)で、数年間は植放しに耐えます。S・ベルビアナ、S・ヒスパニカなど特に強健で栽培容易です。

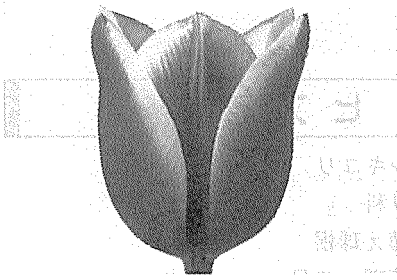
〈栽培・管理〉

- (1) 植え場所の選定、畑づくりなどは総論に準じて行います。
- (2) 植えつけ期は10月、大球で15cm間隔、中球10～12cm間隔、小球は8～10cm間隔に植え、覆土は球根の高さの2～3倍とします。
- (3) 数年間は植放しとするので、毎年雪どけ直後に化成肥料(3要素各12～15%のもの)50～70g/m²を、植物体に触れないように施してやります。
- (4) 病害虫の心配はほとんどありません。
- (5) 数年に1回、葉が黄ばみかけた頃に球根を掘り上げ、茎葉を除いて屋根下で乾燥を行い、秋期植込みまで貯蔵しておきます。

〈楽しみ方〉

S・シビリカ種は小形で石組みの庭や鉢栽培に適し、S・ヒスパニカ種は青、ピンク、白など花色が多く花立ちもよいので、リボン花壇や花壇の縁取りなどに好適です。

また、S・ベルビアナ種の鉢栽培や、S・ヒスパニカ種のプランター植えもまた楽しいものです。



チューリップ

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4月上旬～5月上旬

〈種 類〉

チューリップ属は、おもに地中海東部沿岸から中央アジアにかけて約150種ほどが分布しています。園芸チューリップは約400年前に上記の種の一部がヨーロッパに伝えられ、主としてオランダで改良されて今日に至ったものです。

現在では、開花期、花形、草姿などで4大別し、それに属する15の小グループに分類しています。そしてこれに属する品種数は、オランダの最近のリストによれば約3,000に達しています。

〈性 質〉

球根は葉が変形してできた耐寒性の秋植えの鱗茎です。毎年、茎葉が枯死して球根を掘り取る頃には、数個の新球根に更新されています。

〈栽培・管理〉

- (1) 植えつける球根は、傷や病斑がなく、大きくてしっかりと重いものを選びます。なお、外側の栗色の皮がはがれないで着いていることが望ましい。
- (2) 植えつけ場所の選定、畑づくり、植えつけの要領、施肥(植えつけどき、追肥)などは総論に準じて行います。
- (3) 植えつけは10月～11月上旬が適期、花を見るだけが目的の場合は12月までは可能です。
- (4) 雪どけ直後3要素各15%位の化成肥料30 g/m²を株間に施すと効果的です。
- (5) 葉や花に油浸状の小斑点を生じ、やがて拡大して茎葉を枯らし、球根も犯す褐色斑点病(ボトリチス病)防除のために、適時マンネブダイセン600倍液を散布します。また、生育中茎葉が紫色になってくる球根腐敗病株や、花色が濃淡モザイク状になるウイルス病株は見つけ次第抜き捨てます。
- (6) 茎葉が枯れてきて球根外皮の1/3～1/2が栗色になったら掘り取ります。
- (7) 球根掘取後、茎葉、古皮等を取り除き、十分な通風乾燥状態で秋の植えつけ時期まで貯蔵しておきます。なお、この期間中に、腐敗その他の障害球を取り除きます。



ヒアシンス

- ニシキユリ
- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4月

〈種類〉

ヒアシンスは地中海沿岸と南アフリカに約30種分布していますが、現在の園芸品種は、上記のうちヒアシンス・オリエンタリスがオランダに導入されて改良されたものが主で、ダッチヒアシンスと呼ばれるものです。一方フランスに入ったものはローマン・ヒアシンスと呼ばれ甚だ見劣りし、また、シリア原産のH・アズレウムは極小形でロックガーデンなどに用いられます。

〈性質〉

耐寒性の秋植え球根で、葉の基部が肥厚して球根となった鱗茎です。

ローマン系はよく分球するがダッチ系は自然分球が困難で、人工繁殖処理を行います。また、ダッチ系は球根が大きく花穂長大、花色が豊富です。

〈栽培・管理〉

- (1) 使用する球根は、傷や病斑がなくてなるべく根盤部が小さく正円に近い形をしているもの、大球でしっとりと重みを感じるものを選びます。
- (2) 植え場所の選定、畑づくりは総論に準じます。
- (3) 植えつけは9月下旬～10月中旬、植えつけ間隔は球根の直径の2～3倍ぐらいとし、これに、球根の高さの2～3倍の覆土をしてやります。
- (4) 花の盛りが過ぎたら花穂をしごくように摘花して捨てます。
- (5) 6月半ば葉の2/3位が黄変して、地際で簡単に折れるようになったら球根を掘り上げ、日陰で十分乾燥します。球根の貯蔵中に黄腐病球の選別に努めます。

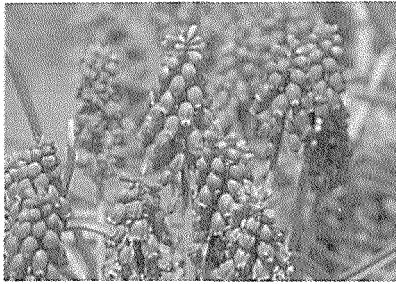
〈繁殖〉

自然分球しないダッチヒアシンスは、7月上～中旬に人工繁殖処理(ナイフで球根底部から球高の2/3まで8分割するノッチング法や、球底の発根部の外周を一周し球根の中心芽を含めて円錐状にくり抜くスクーピング法など)を行い、秋の植えつけ期まで、傷口を上にして乾燥貯蔵を行います。

〈楽しみ方〉

花色の鮮やかさと草出来のそろいの良さは抜群で、模様花壇、リボン花壇などに好適、また、鉢植え、プランター植えにも良い。

最も水栽培に適し水栽グラスを用いたり水盤植えにしたり適応範囲は広い。



ムスカリ

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 4月

〈種類〉

ムスカリは地中海沿岸地域から中近東にかけて約40種が分布しています。代表的なものには、ムスカリ・ボトリオイデス(ブドウムスカリとも言われ、青紫色の花、草丈約25cm、この変種で白花のM・ボトリオイデス・アルバも美しい)M・アルメニアカム(最も代表的なムスカリ、花色コバルトブルー、草丈約25cm、変種に八重咲きのブルー・スパイク、矮性種のカンタブがある)M・コモサム・ブルモーサム(ハネムスカリとも呼ばれ、藤紫色の羽毛状の花穂がユニークである)その他M・ラチフォリウム、M・モスカーツム、M・ネグレクトゥムなどがあります。

〈性質〉

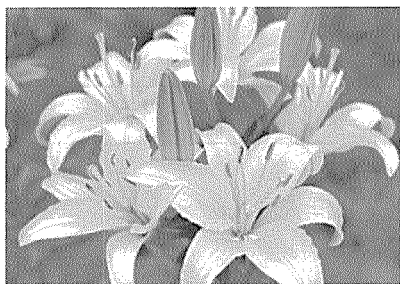
耐寒性の球根(鱗茎)で、植えつけるとすぐに葉を出してくる性質があります。繁殖は球根につく子球によって行います。

〈栽培・管理〉

- (1) 使用球根は、傷や病斑のあるものは避け、大きくて重いものを選びます。
- (2) 植え場所の選定や畑づくり、植えつけの要領や施肥などは総論に準じます。
掘り上げない年は融雪直後に化成肥料(3要素各12~15%のもの)50~70g/m²を、葉に触れないようにして施します。
- (3) 植えつけ時期は10~11月が適当、あまり早いと年内に葉が伸びすぎて、翌春の花壇が見苦しくなります。
- (4) 病害虫の心配はほとんどありませんが、連作ではネダニが発生するおそれがあります。
- (5) 草丈の低い花なので除草に努める必要があります。
- (6) 球根は毎年掘り上げる必要はなく、数年に1度、葉が黄ばんだ頃に掘り上げて日陰で乾燥し、秋の植付期まで貯蔵しておきます。

〈楽しみ方〉

鮮やかな青紫色で、他の種類の花色との組み合わせが面白く、また高性の花の下草として効果的、花壇の縁取り、リボン花壇等にも好適です。



ユリ

- ユリ科
- 秋植え球根
- 開花期 6～9月

〈種類〉

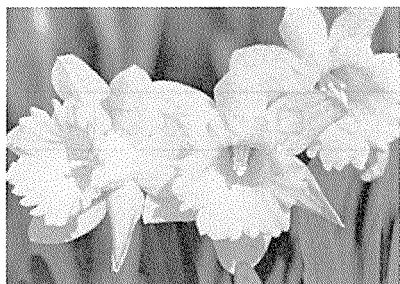
世界のユリ属は100種近くで、すべて北半球の亜熱帯から亜寒帯にかけて分布し、北米に25種、ヨーロッパに12種、アジアに59種あります。そしてその花形で、テッポウユリ系、ヤマユリ系、スカシユリ系、カノコユリ系の4つに分類しています。一方、ユリの品種改良は20世紀半ば以降急速に進み、英国王立園芸協会へ登録された園芸品種は2000を超え、これらは種間交雑が多く、アジアティック・ハイブリッド、オリエンタル・ハイブリッド、トランペット・ハイブリッドなどのグループに優れた品種が多く含まれています。

〈性質〉

葉の変形物で、幅が狭く厚い鱗片が瓦状に重なりあい、地中の短縮された茎に着いて球根(無皮鱗茎)を形成します。球根上部の地中の茎の節から栄養を吸収する上根を出し、また、その節に繁殖用の小球(木子)を着生する特異なもので、耐寒性の極めて強い球根です。

〈栽培・管理〉

- (1) 植えつけは10～11月上旬がよく、外皮のない球根なので、入手後できるだけ早く植えつけないと球根が消耗します。
- (2) 植え場所、畑づくりは総論に準じ、耕うんは深いほど(30cm位)よい。
- (3) 植えつけ間隔は大形種(球根の大きさ)で20cm、中形種15cm、小形種10cm程度とし、間隔と同程度の深さに覆土してやります。
- (4) 早春、葉が開かないうちに化成肥料(三要素各15%位)30g/m²を施して、軽く土寄せを行い、花が終ってからも同程度の追肥を行ってやります。
- (5) 葉がねじれたり、葉緑にモザイク状の濃淡が見られる株は、ウイルス病に犯されているので抜き捨てます。また、雨の後には早速とマンネブダイセン600倍液を散いて灰色カビ病の防除を行い、アブラムシを見つけたら、直ぐにスミチオン乳剤1,000倍を散布してやります。
- (6) 球根の掘り取りは、10～11月上旬なるべく次の植え場所を準備してから行いたいものです(無皮鱗茎は、掘り上げ後その儘では消耗が激しい)



スイセン

- ヒガンバナ科
- 秋植え球根
- 開花期 3～4月

〈種類〉

スイセン属は約30種で、その生れ故郷はヨーロッパとアジア(中国)にまたがっています。品種改良も大いに進んで1万数千種に達し、その花形、花色、草姿によって、ラッパ水仙群、大杯水仙群、小杯水仙群、八重咲き水仙群、トリアンドルス群、キクラミネウス群、ジョンキラ群、房咲き水仙群、ボエティカス群、原種および自然交雑群、スプリットコロナ群、以上に属さないもの、に分類され、これらに、それぞれ数多くの品種が所属している訳です。

〈性質〉

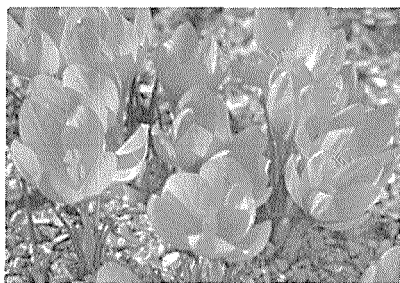
葉の基部が肥厚して球根(鱗茎)を形成するもので、分球性が高い。毎年掘りとり数年間には植え放しに耐え、分球、開花も順調、耐寒性は強い。

〈栽培・管理〉

- (1) 球根購入の際は、硬く締って重量感があり、傷や腐敗の無い無病株を選びます。また、1球1芽のものが大きく立派な花を咲かせます。
- (2) 植え場所、畑づくり、施肥などは総論によりますが、植え放しの場合は、雪どけ直後に化成肥料(3要素各15%程度)50～70g/m²を、株にかけないように施します。球根の植えつけ時期は9月末～10月中旬が適期です。
- (3) 3～4年毎に分球して植え直すのがよく、掘り上げは葉の1/3～1/2黄変したころに行い、数球宛て束ねてつり下げ、日陰で通風乾燥を行います。葉や根が完全に枯れたら取り脱し、植えつけ期まで屋内で乾燥貯蔵します。貯蔵中はときどき点検して、腐敗球など病球を取り除いてやります。

〈楽しみ方〉

- (1) 花形、花色、草姿などバラエティーに富み、品種数も多いので収集展示的栽培は興味を集め効果的でしょう。
- (2) 花壇用としての群植、庭の一隅やテラスの角、芝生の隅などに数株ずつまとめて小集落状に配し、自然風な味わいを楽しむのも趣きがあります。
- (3) 原種や矮性の種類をロックガーデン風に植栽するのもよく、また、各種、各品種を鉢、プランター、水栽培等種々工夫を凝らしてみたいものです。



クロッカス

- アヤメ科
- 秋植え球根
- 開花期 3～4月

〈種類〉

クロッカスは、おもに地中海沿岸からトルコにかけて約80種が分布し、開花期によって、春咲き系、秋咲き系、冬(寒)咲系に分類されていますが、園芸用として広く栽培されているのは春咲き系で、中でも品種改良が進み花色も豊富なダッチ・クロッカスと呼ばれるグループが代表的なものです。また、古くから知られるサフランは秋咲き系に属します。

〈性質〉

茎の変形して栄養を蓄えた球根(球茎)で耐寒性が強い。日照を好み、早春ほとんど葉を伸ばさずに開花し、花後に葉を伸ばします。

〈栽培・管理〉

- (1) 使用する球根は、花壇、庭植えは中球でよいが、水栽培には大球を用います。どの場合でも固く締まって重く、無傷、無病の球根を選びます。
- (2) 植えつけは10月中旬に、水栽培は10月中旬～11月上旬に始めます。
- (3) 植え場所はとくに日当たり(日溜りと言えるようなところでき麗に咲きそう)のよいところを選びます。畑づくり、施肥などは総論に準じ、植えつけ間隔は球根の直径の2～3倍、覆土は球根の高さの3倍ぐらいとします。
- (4) 球根はネズミの好物なので食害されないよう、注意が必要です。
- (5) 球根を腐らせる軟腐病、乾腐病の発生を抑えるためチッソ多用をさけ、病球の抜き捨てや、貯蔵の病球選別に努めます。
- (6) 葉が黄ばんだら球根を掘り上げ、干からびた母球と葉を除き、日陰で通風乾燥を図ります。子球(木子)が数多く着くので繁殖球として用います。

〈楽しみ方〉

花壇植えとしても用いるが、庭の一隅にビッシリと植え込んだり、庭石の基部や踏石の角に数球、あるいは芝生の中に点在させるのも趣きがあります。水栽培グラスによる栽培や、ワイングラス、果物皿などのガラス容器での水苔栽培も趣きがあります。

鉢栽培、水栽培などは初めから暖かい室内に入れず、自然低温に2カ月ぐらいあわせて、根も十分に伸びてから取り込むとスムーズに開花します。



球根アイリス

- アヤメ科
- 秋植え球根
- 開花期 4～5月

〈種 類〉

球根アイリスには約80種もありますが、スパニッシュ・アイリスやイングリッシュ・アイリス等を含むキシフィウム節のグループ、I・レーティクラータやI・ダンフォーディアエ等を含むレーティクラータ節のグループ、そしてI・プカリカやI・ブラーニフォリア等を含むジュノーのグループがおもなもので、これらにはそれぞれに数多くの園芸品種があります。なかでも、オランダで改良作出されたダッチ・アイリスは、キシフィウム節のスパニッシュ・アイリスに幾つかの野生種を交配、育成したもので、花色の豊富さ、草姿の良さ、品種数の多さから、球根アイリスの代表として知られています。また、近年ミニアイリスとして知られるI・レーティクラータが、わが国でも栽培されています。

〈性 質〉

耐寒性の秋植え球根(鱗茎)で、多数着生する木子で繁殖します。

〈栽培・管理〉

- (1) 使用球根は、傷球、病球を除き、大きくて重さを感じるものを選びます。
- (2) 植えつけ場所の選定や畑づくり、施肥などは総論に準じて行います。
- (3) 植えつけは10月中～下旬がよく、植えつけ間隔は球根の直径の3倍程度とし、球根の高さの2～3倍の覆土を行います。
- (4) 栽培期間中、茎葉の葉縁にモザク状の濃淡が現われるウイルス病株、地際部が暗緑水浸状になり軟化する白絹病株を抜き捨てます。花後摘花します。
- (5) 茎葉が黄変したら球根を掘りとり、茎葉を着けたまま日陰で通風乾燥を行い、十分乾燥後茎葉と根を除きます。木子は散逸しなすように注意します。
- (6) 球根貯蔵中に、傷球、病球、とくに白絹病(白く細い絹糸状の菌糸がはびこる)のついた球根は徹底して除き、残った球根はPCNB剤を粉衣します。

〈楽しみ方〉

草丈がかなり高いので寄せ植え花壇の中心近くや、境栽花壇の後方に植え込むのもよく、また、庭の一隅に無雑作に群植しておくのも趣きのあるものです。



アネモネ

- キンボウゲ科
- 秋植え球根
- 開花期 4～5月

〈種類〉

アネモネの仲間は約120種もあるといわれていますが、その多くは宿根草で、球根性のアネモネはヨーロッパ南部から地中海沿岸に自生しているものが多いようです。一般には花色鮮麗で大輪のアネモネ・コロナリアから生まれたデ・カーン(一重又は二重咲きで大輪、花色は赤、青、白、桃、白赤覆輪と豊富で、草丈高く切花にも適する)や、セント・ブリジド、種は違うがアネモネ・フルゲンスなどがよく知られています。

〈性質〉

耐寒性の強い秋植え春咲き球根(塊茎)、数年間は植え放しでよく、繁殖は種まきによって行います。

〈栽培・管理〉

- (1) 球根養成が目的なら秋に種子をまきますが、一般に花を楽しむ栽培では球根を買います。球根は小さな円錐形でかなりしわがより、干からびた感じですが、傷ついたり、カビがついたり、腐敗などしていないものを選びます。
- (2) 耕土深く、日当たり排水の良好な場所を選び、植えつけ7～10日前に㎡当たり石灰100～150g、完熟堆肥約2kgを全面にまき、20～30cmの深さによく耕やします。数日後に化成肥料(3要素各15%程度)約100gを全面に施し、十分に打ち混ぜます。数日後に10～12cm間隔で深さ5～7cmに植えつけます。
- (3) 植えつけ時期は10～11月中旬、数年間植え放しにするので、翌年度以降は、早春に化成肥料を㎡30～50g葉にかけないようにして施してやります。
- (4) アブラムシがつき易いのでよく注意して、発生すればすぐに、スミチオン乳剤1,000倍液やDDVP乳剤1,000倍液を散布して防除します。

〈楽しみ方〉

A・コロナリア系やA・フルゲンス系は、花形優れ花色も多彩で花壇に群植するとよく映え、素朴な花形、色彩のA・ブランダは内地のニリンソウに類似し、ロックガーデンの植え込みに好適です。

アネモネは開花後そのままにしておくとしづきが実り、自然にこぼれて次つぎに芽生え、自然に繁殖して開花するので楽しみなものです。